

町道東黒牧上野山線改良事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告

東黒牧上野遺跡

A 地区

1995年3月

富山県大山町教育委員会



東黒牧上野遺跡A地区竪穴住居跡群（西より）



東黒牧上野遺跡A地区出土の釣手土器（第2号住居跡）

序

豊かな自然に恵まれた大山町は、古くより先人が生活した足跡としての遺跡が数多く存在しています。これらの遺跡は、郷土の歴史を知る上でかけがえのない貴重な資料であり、当時の生活や先人の劳苦を偲ぶことのできる貴重な文化遺産であります。

今回、里山の台地に所在する東黒牧上野遺跡を発掘調査したところ、縄文時代中期の竪穴住居跡6棟や多数の穴が発見されました。この中には、富山県内でも類を見ない極めて残りの良好な住居跡も含まれております。また、ほぼ完形の釣手土器や有孔鍔付土器をはじめ、日頃縄文の人々が道具として手にした石器や土器などの品々も數多く出土しました。

そこで、こうした多くの文化遺産を保護・保存し、後世に伝えることが重要と考えここにその報告書をまとめたものです。

この報告書が、多くの人々に地域の歴史と文化財保護のために活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査にご協力いただいた地元の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係各機関に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

大山町教育委員会
教育長 津田憲一

例　　言

1. 本書は、富山県上新川郡大山村東黒牧上野遺跡A地区において、町道改良事業に先立ち実施した発掘調査の報告である。

調査期間及び発掘面積は、以下の通りである。

調査期間 平成6年7月4日から同年11月18日 発掘面積 1,750m²

2. 調査は、大山村教育委員会が主催し、調査にあたって富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を得た。

3. 調査事務局は、大山村教育委員会に置き、課長代理中村昭志の補佐を受け社会教育係長山崎安治が調査事務を担当し、教育課長杉森芳正が総括した。また、調査期間中は、富山県埋蔵文化財センターの指導・助言を得た。

4. 調査参加者は、以下の通りである。

調査担当者 富山県埋蔵文化財センター調査課長狩野 隆・同主任神保孝造

調査(協力)員 富山県埋蔵文化財センター調査課文化財保護主事高橋真実

現地発掘作業補助員 大久保雅史・秋月貴博

現地整理作業補助員 高井静子・村上雅代

また、発掘作業にあたっては、大山村シルバーパートナーハウス並びに御境工業の協力を得た。

5. 発掘調査・資料整理・本書の作成にあたり、次の方々から様々な援助をいただいた。記して深甚なる謝意を表したい。

東黒牧自治会・中村幸男・小島俊彰・斎藤 隆・荒井有美子・石井正子・斎田千津子・多賀理恵

6. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得、調査担当者の狩野と神保が分担して行なった。

なお、執筆にあたっては、調査に至る経緯の項を中村が担当している。個々の文責は、その文章末に記した通りである。

目　　次

I 遺跡の位置と環境

第1図 地形と周辺の遺跡.....1

第2図 地形と区割図.....2

II 調査に至る経緯.....3

III 調査の概要.....3

1. 調査の概況.....3

(1) 調査位置.....3

(2) 調査の経過.....3

(3) 層序.....4

2. 遺構.....5

(1) 第1号住居跡.....5

第3図 第1号住居跡付近遺構実測図.....5

(2) 第2号住居跡.....6

第4図 第2号住居跡実測図.....7

(3) 第3号住居跡.....8

(4) 第4号住居跡.....8

第5図 第3・4号住居跡実測図.....9

(5) 第5号住居跡.....10

(6) 第6号住居跡.....10

第6図 第5・6号住居跡実測図.....11

(7) 穴.....12

第7図 第23号穴付近遺構実測図.....12

III 遺物.....13

(1) 土器.....13

第8図 土器実測図.....15

第9図 土器拓本図.....16

第10図 土器拓本図.....17

第11図 土器拓本図.....18

第12図 土器拓本図.....19

第13図 土器拓本図・土製品実測図.....20

(2) 石器.....21

(3) 土製品.....21

第14図 石器実測図.....22

第15図 石器実測図.....23

IV まとめ.....24

表 産小屋と月小屋.....26

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

[表紙は東黒牧上野遺跡A地区遠景(北東より)]

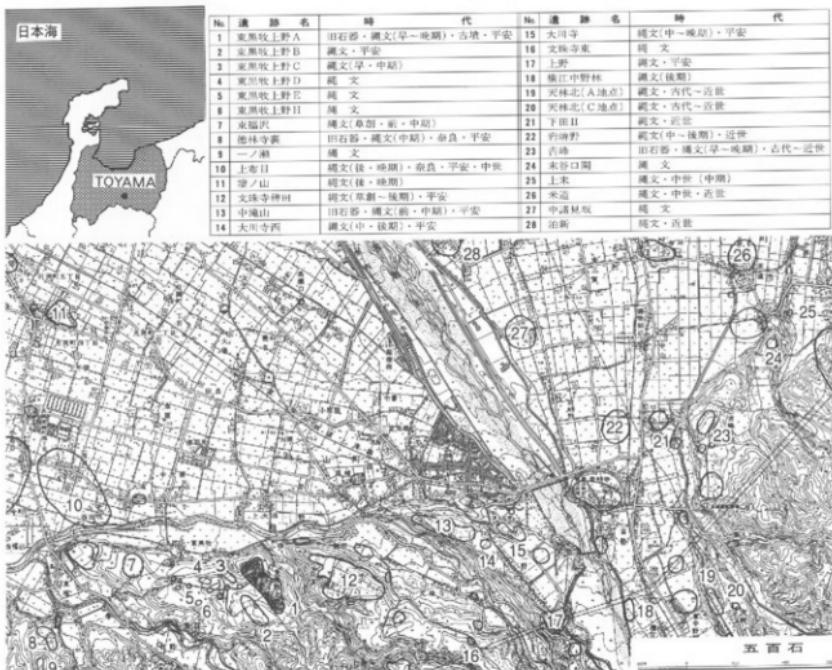
I 遺跡の位置と環境

東黒牧上野遺跡は、富山県上新川郡大山町東黒牧字上野地内に所在する。大山町は、県の南東部に位置し、北が富山市、東が立山町、南が岐阜県と接しており、東西に長い町域となっている。地形としては大半が山地で、残りは町の中心部上流地区を肩頂とした常願寺川の扇状地が占める。この川は、町域の東境を北流し扇頂部や上流部には発達した河岸段丘を見ることができる。高位段丘としては栗原野台地、下位段丘としては上野段丘がそれにある。また後者の西側には、神通川の支流熊野川が流れ、その左岸に文殊寺地区及び東黒牧地区がある。当遺跡は、この東黒牧地区の丘陵上に立地する（第1図）。

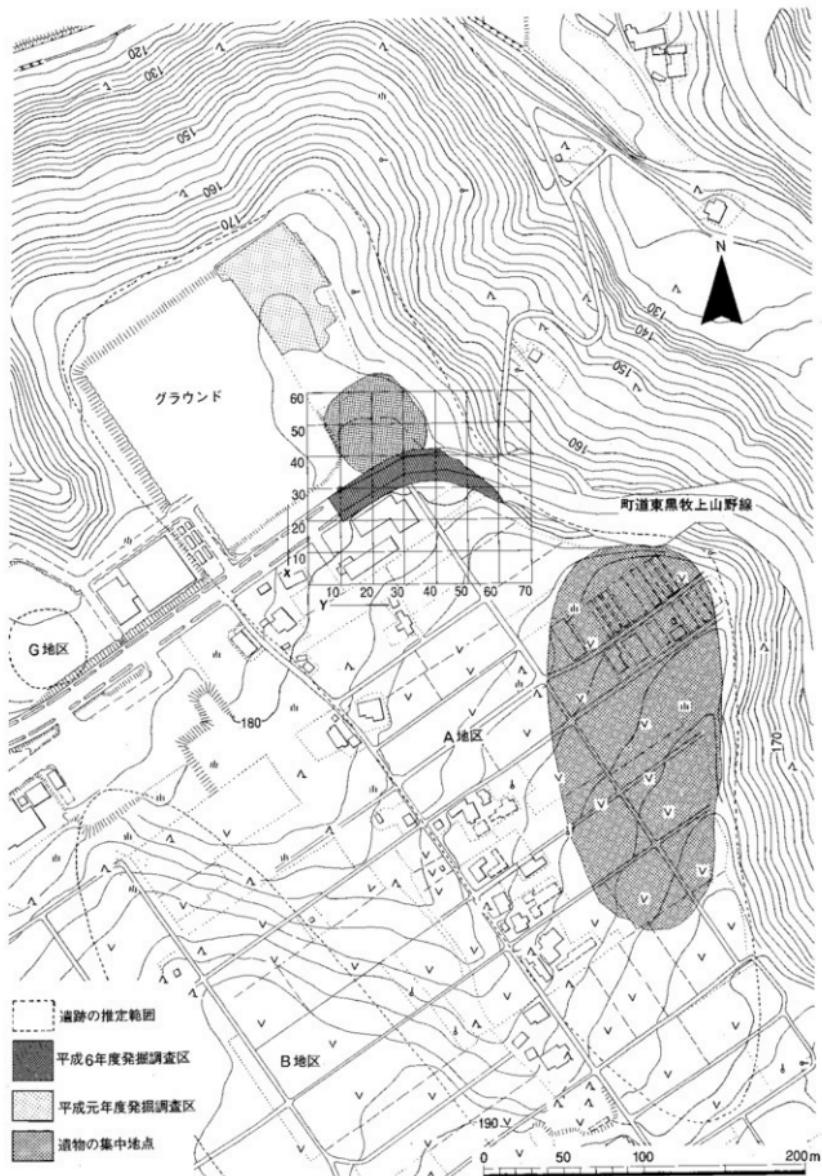
遺跡がのる丘陵は、東西約2km、南北0.2~0.6kmと東西に細長く、標高が140~200mを測る。平野部と接するあたりは、比高差が40~80mの崖状となっており、その差が最もきつい東側縁辺部一帯に遺跡が広がっている。遺跡の規模については、昭和60年町史編纂事業の一環として行なわれた分布調査〔久々1986・90〕や同丘陵上で学園都市建設事業が遂行された際の試掘調査〔久々1989〕・一部本調査〔斎藤・岡本1990〕の成果が詳しいが、約40万m²と広大な面積に旧石器、绳文、古墳、平安時代の遺物が、時代や時期によってまとまりを異にし計6地区にわたって分布する。今回の調査対象地は、そのA地区（绳文早・中・晚期、平安）北側部分になる。

東黒牧上野遺跡をとりまく周辺の遺跡としては、大山町東福沢、文殊寺稗田、大川寺遺跡、立山町吉峰、天林北・岩峠野遺跡など著名な绳文時代の遺跡がならぶ。いずれも常願寺川の両岸に発達した河岸段丘上に広く点在しております。往時の遺跡のあり方がそこによみとれる。

（神保）



第1図 地形と周辺の遺跡



第2図 地形と区割図(1:3,000)

II 調査に至る経緯

本町は、地域の大部分が山地の地域特性から、比較的開発の遅れていた平坦地と山地の間に位置する丘陵部、いわゆる里山地域をいかに開発し、町勢の振興発展に結びつけるか町の大きな課題となっていた。このため、昭和54年度よりその地域における社会的諸条件等に留意しながら里山地域を福沢・文珠寺・上池上野・岡田・牧・和田の6地域とし、その開発の施策を方向づけ、さらに具体的対策として、東黒牧・文珠寺地域における学園都市構想をはじめ、上池上野地区・牧地区においても開発計画を策定し、その実現方策等を推進してきた。

現在、里山開発は、東黒牧地区における研究学園都市構想の中核施設である富山国際大学が平成2年4月に開学し企業の研修所等も次々と立地されている。それに伴って幹線及び補助幹線道路も建設されてきた。しかし、計画が後となっていた研究学園都市から町の中心市街地への道路網が、未整備状態であった。そこで国の交付金事業認定や起債対象事業として平成3年度から実施する事となったが、計画道路の起点と終点に埋蔵文化財古墳地が存在した。そこで、富山県埋蔵文化財センター・町建設課・当教育委員会の三者で保護措置を協議し、まず平成4年度、終点付近の文珠寺瀬戸古墳跡を同センターの協力で調査し、その結果から路線変更して廻を現状保存した。一方、道路起点付近の東黒牧上野遺跡A地区は、平成元年に大学のグランド建設に伴って同センターの協力で発掘調査したところ、縄文時代中期中頃の竪穴住居跡が29棟も発見されたため、設計変更された後に、県史跡指定地となった箇所の隣接地である。このため、その保護措置は慎重な取り扱いが要求され、関係機関との協議を重ねた結果、今年度の調査に至った。

平成6年度の発掘調査もセンターの協力により実施したが、6棟の竪穴住居跡や多数の遺物が発見されたため、再度協議を行なった。しかし、地形・工法上で設計変更が困難な箇所のため記録保存を余儀なくされるに至り、調査の完了後、遺存状態が良好な住居跡1棟を切り取り移設した。今後、これを復元・公開し、町の文化振興や活性化に広く活用していきたいと考えている。

(中村)

III 調査の概要

1. 概況

(1) 調査位置（第2図） 調査範囲は、道路改良事業に伴うため幅15~20m・延長約100mとほぼ東西に細長い。平成元年度の本調査箇所（斎藤・岡本1990）からは、南東に約90mの地点にある。その間は、雑木林で昭和62年度の試掘調査（久々1989）では縄文時代中期後葉の遺物集中区が確認されている。

対象地の現況は、中央部を既存の町道が通り、それを境に北側が雑木林、南側が畠地となっている。標高は、175~180mで丘陵の縁辺部にあたることもあることとあって、東端には微地形としての小さな谷が入り込む。この谷の縁に沿って切り込むように既存の町道が下っており、下りぎわの南北ではかなりの高低差がみられる。特に南側の畠地とは、落差が大きく崖状を呈する。ただ、同箇所の調査で二次的な層序や先の谷に続く谷地形を確認したこと、また、かつて南側一帯の畠地を重機で均したとの地元の話もあり、元来この付近は、谷に向かってなだらかに傾斜した地形であったと考えられる。

(2) 調査の経過（第2図、付図、図版第1・2） 発掘調査は、まず前記した北側の遺物集中区の延びを確認するため、畠地部分にトレンチを設け発掘範囲を確定した後、既存町道の舗装・伐採物などの撤去を兼ねて表土層の荒れを重機により排土した。統いて国家座標軸に合わせて10m間隔に基準杭を設け、X軸を南北に、Y軸を東西にとり2m×2mを1区画とし人力により各区の表土排土・遺物包含層の調査を行なった。その後、地山上面での遺構確認作業を実施し、さらに確認した遺構ごとにその検出作業を行なった。

その結果、Y40列~Y50列で北東方向に傾斜する谷地形が確認された。深さは、最深部で地表下約180cmを測り、



包含層発掘作業状況



遺構発掘作業状況



遺構切取り作業状況



遺構切取りウレタン吹付作業状況

埋土中にはやや大型の土器破片がめぐらしき。遺物の多くは、この谷部一帯からY25列にかけて出土し、特に遺構が直下に存在する箇所で集中的に出土する傾向が見られた。

また、遺構も唯つ調査区の西端で2棟の竪穴住居跡を検出したほかは、全て谷部の西側縁辺部を中心に4棟の竪穴住居跡と多数の穴がまとまっていた。

(3) 層序(付図) 一帯の基本層序は、1層：にじむい黄褐色土(0~15cm)、2層：黒褐色粘質土(0~20cm)、3層：明褐色粘質土(10~30cm)となり4層の黄橙色粘質土に統く。

1層は、表土で調査区の西側及び南側の畠地部分では、上に残土や客土が見られた。特に後者では、分厚い客土があり、焼土・炭灰のほか縄文時代の遺物や古代の遺物が混じった。2層は、遺物包含層である。その上半部に遺物が多く含まれていた。3層は、漸位層で上面が遺構の掘り込み確認面となる。調査区の東側半分では、やや黒味を帯び、にじむい黄褐色の色調に変化していた。4層は、いわゆる地山層。谷部の斜面地では、黄橙色粘質土がじょじょに薄くなり、人頭大的円礫が混じる明黄褐色土に変わった。

谷部の層序としては、最下部に円礫混じりの黒色土が約80cmと厚く堆積し、その上に遺物を含む暗褐色土がのる。現地表面との比高差からして、縄文当時すでに谷のある程度は埋まっていたものの、今とは違いかなりきつい谷地形を呈しており、その後ゆるやかに埋まっていたものと考えられる。

その他、調査区の細部では既存町道及び水道管・電線などの施設工事による影響で遺構の一部が削平された箇所が見られた。

以上、今回の発掘調査は、平成6年7月4日から開始し、同年11月18日までの延べ47日間を要した。総発掘面積は、約1,750m²である。

なお、調査の終盤、遺跡の保護措置を検討するため発掘調査が一時中断され、関係機関による協議が重ねられたうえ一部の遺構を切り取り・移設した。

遺構の切り取り・移設作業は業者委託とし、発掘調査の完了をまって遺構の内容・遺存状況の最も良好な第2号住居跡をウレタン吹き付け保護した後、切り取って町の公共施設の一角に移設した。今後は、町教委によってその活用がはかられていく予定である。

(神保)

2. 遺構

(1) 第1号住居跡（第3図、図版第3の上）

位置 X35Y41付近の谷突端部に立地。

形状 当住居跡は、谷突端部が黒色土で埋まった段階に構築されたと考えられる。このため覆土の判別が困難で、その掘り方は確認できなかった。今回は、炉跡のみの検出で、住居跡の平面形・規模とともに不明である。

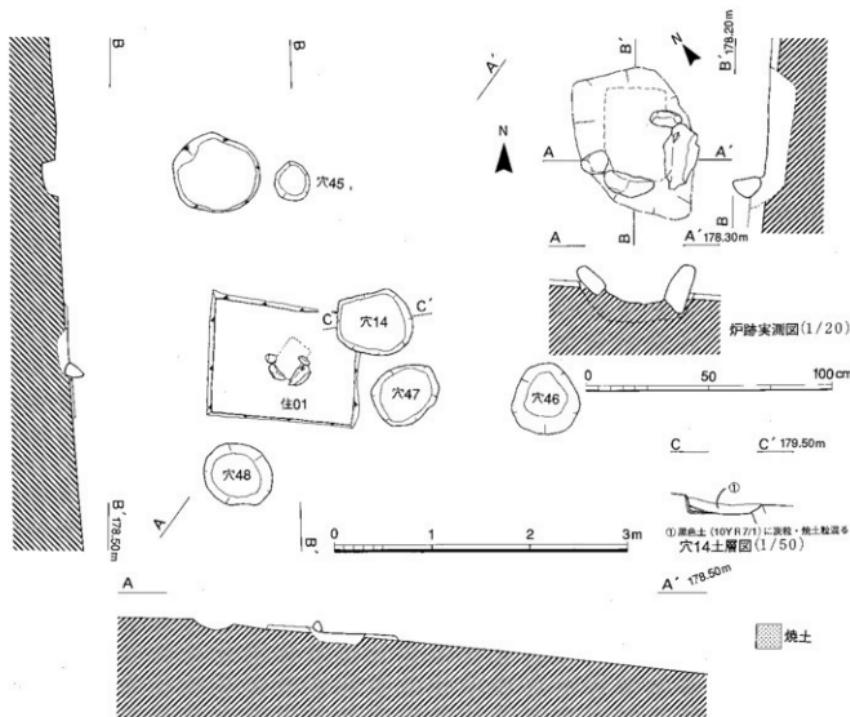
方向 炉の主軸方向から見て、北東向きと考えられる。

床面 床面は、確認できない。ただ炉の周囲を見るかぎり、掘り方が3層下部まで達することは言える。

柱穴 炉のまわりで、第14・45～48号穴を検出した。14号穴を除く4個の穴が、柱穴にかかると見えるが、判然としない。48号穴が、住居跡の主軸上に位置するし、45号穴は、唯柱穴状の掘り方をもつが、これらを結ぶ柱配列の柱穴がおさえられない。14号穴は、60×80cmの長方形を呈する穴で、黒色の覆土に焼土・炭粒の層が混じり周囲の壁が焼けている。いわゆる焼壁ピットと呼称されるもので、近世以降にあてられるようだ。

炉 北側の炉石は欠落するが、単設単式の石組炉である。掘り方は、長方形で短軸45cm、長軸60cm、深さ約20cmを測る。炉石は、長さ10～30cmの扁平な円礫を横長に据えており、形態的には第2・3号住居跡の炉に類似する。内部は、炉石が焼けるものの底には焼土層が見られず、全体に黒褐色の覆土が入っていた。

遺物 炉の覆土から調文を施した中期後半頃の土器片が、わずかに出土している。



第3図 第1号住居跡付近遺構実測図(1/50)

(2) 第2号住居跡（第4図、図版第3の下・図版第4）

位置 X37Y36付近の谷部西側縁辺部に立地。

形状 隅円方形を呈する。北東側の周壁は、風倒木痕跡が切り込む。また、水道管理設工事により、南西から南東にかけての壁・床など一部が削平を受けている。

規模 主軸北東方向で約4.7m、それに直行する軸方向で約4.6mを測る。壁高は、付近の地形が北東にやや傾くため、南西側で約70cm、北東側で約30cmを残す。また、南東側及び北西側の壁は、テラス状の施設に接しており、その上面から30~50cmの高さを残す。県下でも、極めて深い掘り方を残す竪穴住居跡である。

方向 北東方向。主柱穴の配列及び炉の位置から見て、住居跡の北東側が出入り口部と考えられる。

覆土 上面には、にぶい黄褐色土（5~15cm）が入り、下に褐色土（10~40cm）・暗赤褐色土（5~20cm）・褐灰色土（5~20cm）が続き、4層中の床面に至る。各層には、いずれも焼土・炭粒が含まれる。褐色土層は主体をなす覆土で、多量の遺物や円礫を含んだ。また、暗赤褐色土層は、当住居跡が廃絶時かその後に火を受けたことに由来すると考えられる層である。南東・南西・北西の壁沿いほど厚く、一部では焼土状態に変化した箇所も見られた。

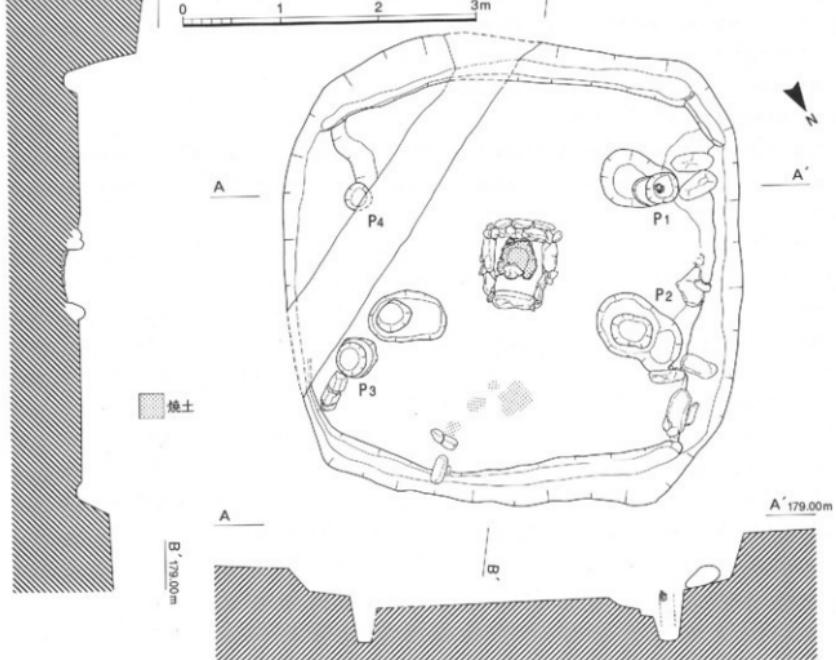
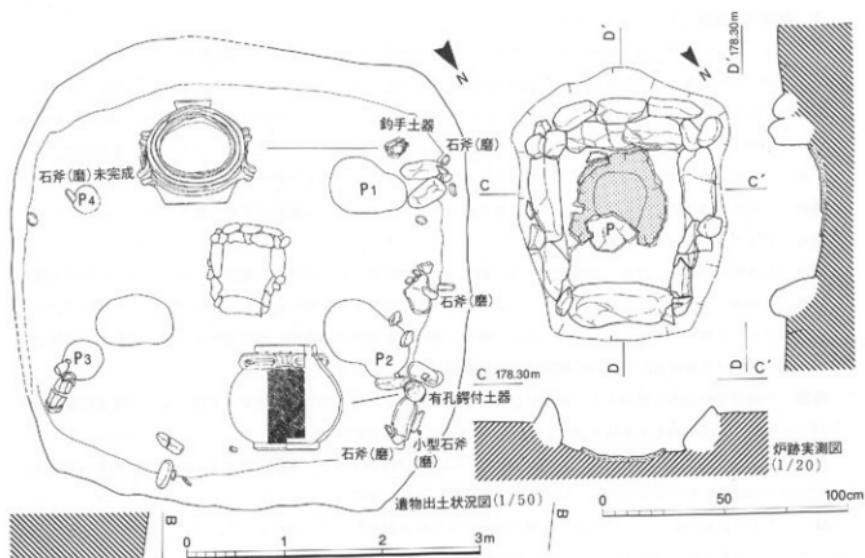
床面 平坦では水平である。炉の周囲や北東側の壁にかけてが硬く、その他はやや軟弱である。また、火を受けたらしく、全体に焼土・炭粒が飛散しており、炉北東側の床面にはその熱によって焼土化した部分も確認された。

柱穴 P1~P4の4本が主柱穴で、その間隔は幅が約2.7m、奥行が約1.4mとなっている。各々柱穴の深さは、P1が床面から47cm、P2が同じく44cm、P3が同じく40cm、P4が同じく37cmを測り、いずれも底が4層下部や以下の疊混じりの明黄褐色土に達していた。また、P2・P3には作り替え或いは、添え柱によるものかはっきりしないが、柱穴状の穴が伴った。さらにP1ではその中央の覆土上面で、炭化した木片が検出された。径約10cm・長さ約10cmの丸材片である。状況から見て、直径12cm前後の木柱の一部と考えられる。当住居が、火を受けた際に地上部は燃えつき、地中にあって火により炭化した一部分だけが遺存したものであろう。その他、火熱による変色・割れ・剥離するものの各柱穴の壁ぎわには、幅20cm前後、長さ20~40cmの円礫が1~2個配されている。同種のものは、次の第3・4号住居跡にもその跡が窺える。また、平成元年度に調査された第1号住居跡（斎藤・岡本1990）、大沢野町直坂I遺跡第1・4・5・6号住居跡（岡本1973）でも認められ、柱穴と密接な関係のある石として注目されている。

炉 単設単式の石組炉である。掘り方の規模は、住居跡全体を切り取り移設し、炉の断ち割り調査を実施していないため不明。炉石は、小さなもので幅約4cm、長さ約5cm、大きなもので幅約20cm、長さ約50cmの円礫を横長に用い80×100cmの長方形を呈する炉としている。出入り口部側及び反対側は、それぞれ大型円礫を1個配しさらに反対側の外側には小型の円礫を据え二重とする。また、北西側の一部には、磨製石斧の頭部片が炉石として使われている。炉はしっかりと焼けており、長期使用されたことが窺える。炉石は、火熱により割れや剥離した石が多く、炉底には硬く焼土がしまった。ただ、焼土は、がの中央より北西側で摺り鉢状に遺存しており、直下に縄文を施す深鉢形土器の大型副部片が確認できることから、炉を作るにあたって、まず当位置にその副部片内面を表側にして敷、次に土を貼りつけ炉底とし、これが火熱によって焼土化したものと考えられる。となると、残された北東側の空間部分の存在が、きにかかる。その間を仕切れば複式の炉形態になりうるが、痕跡は全く見当らない。この点は、次の第4号住居跡の炉にも言えることで、住居跡の時期から考えて複式炉の発生につながる一つの炉形態とみたいが、今回は単式石組炉の範疇でとらえておく。なお、炉内には、暗赤褐色土が充満し、灰層は認められなかった。

周溝 北東・南西周壁沿いに見られ、幅が10~20cm、深さが10~15cmとはっきりしている。

遺物 住居内から縄文中期中葉の終わり頃~後葉の遺物が主に出土している。量は、今回検出した遺構中最も多い。また、北西周壁沿いのテラス付近東西で、有孔飼付土器・釣手土器のほか完形品が出土（第8図9・10、図版第4）したり、小型磨製石斧の出土がめだつなど、他の住居跡との際立った違いが認められる。



第4図 第2号住居跡実測図(1/50)

(3) 第3号住居跡（第5図1、図版第5）

位置 X37Y32付近の谷部西側縁辺部に立地する。2号住居跡とは、西に約2.5mの距離をおく。

形状 隅円方形を呈する。北東周壁は、風倒木痕跡が切り込む。また、南東周壁は、木の根により搅乱を受ける。

規模 主軸北東方向で約3.4m、それに直行する方向が約3.5mとやや広い。壁高は、床面から見て南西側で約30cm、北東側で約25cm、北西側で約50cmを測る。南東側は、搅乱を受けた箇所もあり一概にはいえないが、遺存部分で見れば、約20cmを残している。全般的には、北東方向に向かって深くなり、付近の地形の傾きに沿っている。

方向 2号住居跡と同じ主軸方位をもち、北東方向を向く。また、柱穴の配列や炉の位置から見て、住居の出入口部も2号住と同様で北東側に求められる。

覆土 南西側を中心に、にぶい黄褐色土（5～30cm）が上面に見られ、その下に褐色土（10～30cm）が続き4層地山の床面に至る。褐色土層は、全体に広がっており黄褐色土と同様に大型礫・焼土粒・炭粒が混じる。遺物の大半がこの層に含まれ、覆土の主体をなす層序である。また、南西・北西側の周壁沿いで同層の下に暗赤褐色土の堆積が認められた。焼土・炭粒が混じるもののが局部的な自然堆積層と考えられる。

床面 平坦でやや北西に傾斜する。全体にしまりがあり南東から北東側では、所々に火熱によって焼土化した箇所が認められた。当住居跡も2号住と同じく火を受けたものと考えられる。

柱穴 P1～P4の4本主柱である。間隔は幅約1.7m、奥行約0.7mで、床面の中央よりやや西に奥まっている。柱穴の深さは床から40～50cmを測り、いずれも4層下部に達している。

炉 炉石が抜取られているものの、痕跡から見て単設單式石組炉と考えられる。掘り方は、ほぼ長方形を呈し長軸約95cm、短軸約80cm、深さ約20cmを測る。掘り鉢状に凹む炉底に焼土が厚く残り、上部に焼土・炭粒混じりの黒褐色土・暗赤褐色土の順に堆積していた。

遺物 覆土を主に縄文中期中葉の終わり～後葉の遺物が出土。

(4) 第4号住居跡（第5図2、図版第6）

位置 X39Y30付近の谷部西側縁辺部に立地する。2号住居跡の北西約7m、3号住居跡とは北に約1m離れる。

形状 北側が調査区外に延び未調査のため、明確ではないが、掘り方・周壁溝の状態から見て、隅円若しくは馬蹄形を呈するものと考えられる。

規模 主軸北東方向で約4.7m、それに直行する方向が推定で4～4.5mとみられる。確認できた壁高は、ほぼ同じで、床面から約40cmを残す。付近の地形からやや南西側の残りが浅い。

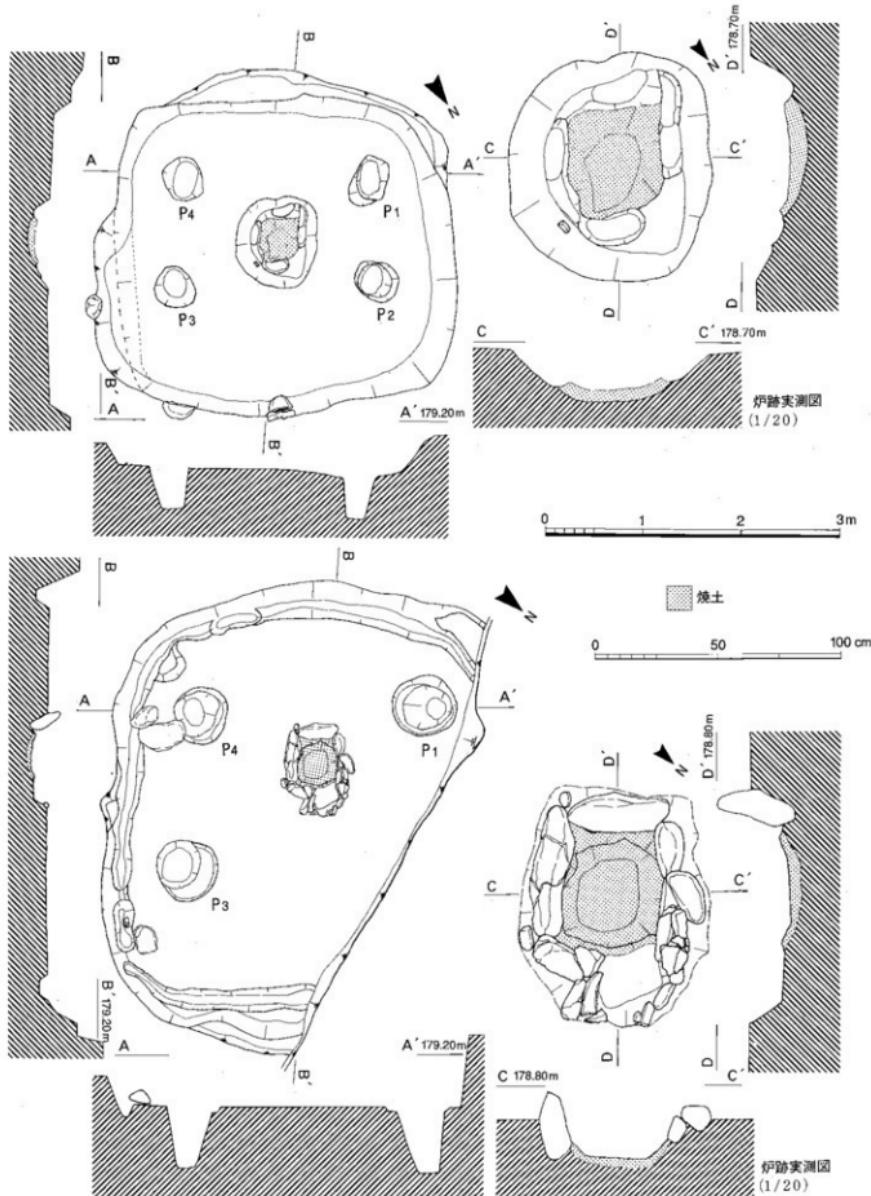
方向 2・3号住居跡と同じ主軸方位で、北東方向を向く。住居の出入口も同様で北東側と考えられる。

覆土 北西側の周壁から調査区外にかけて風倒木痕跡が入り観察しにくいが、上面は5～20cmの厚さで褐色土が覆う。その下は、10～30cmの厚さで暗褐色土が堆積し、4層の床面となっている。同層には、大型礫・焼土粒・炭粒が混じるが、遺物は2・3号住居跡に比べては多くなかった。

床面 周壁側がわずかに高く、炉に向かってやや凹む。炉の周囲が硬くしまるが、他はやや軟弱である。

柱穴 4本主柱の住居と考えられる。今回は、P1・P3・P4を検出した。柱間隔は、P2にあたる位置が未調査のため、推定であるが奥行約1～1.2m、幅約1.8～2mであろう。掘り方の平面形及び周壁溝の状態から、出入り口側の幅がやや開く可能性がある。各柱穴の深さは、調査した住居跡の中で最も深く、いずれも床面から50cmを越しP1では約70cmに達した。また、P4の周壁側では、2号住居跡にも見られた礫の配列が認められた。礫は、内側にやや傾斜して位置しており、一つが大型の石皿として使用されたものであった。

炉 掘り方の規模は深さが約30cmで、長軸約100cm、短軸約80cmの長方形にちかく、これに沿わせるように炉石を横長にねかせ据えている。ただ出入口側では、幅を狭めやや四角く突出させ、いわゆる添炉状の空間を設けており、



第5図 第3・4号住居跡実測図 (1/50) 1:3号住居跡 2:4号住居跡

2号住の炉と同様に単なる單設單式石組炉と扱えない形態となっている。同所に据えられる炉石が小型のものに対して、本体部分のそれは幅約30cm、長さ50cmを越える礫も見られ大型である。また、後者の炉底が摺り鉢状に掘り凹められ上に土を貼り付ける丁寧な作りで、それが焼土化するが、前者は平坦で焼土の痕跡が見られないなど、炉の使い方を意識した作り方が感じられる。なお、炉は長期使用されたものらしく、炉石の大半が火熱で削れや剝離を生じていた。また、炉内には褐色土が充満し、礫・焼土・炭粒と若干の土器片が含まれた。

周溝 幅10~20cm、深さ10~15cmの溝が全周するものと推定される。

遺物 2・3号住居跡と同じく、覆土内出土の遺物が多い。時期も、中期中葉の終わり~後葉のものが主。

(5) 第5号住居跡（第6図1、図版第7・8の上）

位置 X29Y12付近の平坦地に立地する。2・3・4号住居跡から南西に約45mの距離をおく。

形状 円形を呈する。重機による表土撤去の際、一帯に客土が存在したため、それと共に過剰に掘削した感がある。

規模 直径は約2m。壁高は床面から約10cmを測る。付近の地形・掘り方の状態から判断すれば、掘削前の遺存状況は、10~20cmほど規模が増すと推定されるが、今のところ県下で最小の住居跡にはいる。

方向 床面のしまりから考えて出入り口部は、上記3棟と同様で北東側にあったと推測される。

覆土 炉を中心にして焼土があふれ、その周囲へドーナツ状に炭粒と若干の焼土粒・土器片を含む褐色土が入る特異なものである。焼土は炉を覆い隠すように盛り上がり、かなりのしまりをもっていた。

床面 平坦で水平である。炉の周囲から北東側の一部床面が硬くしまるため、同方向に出入り口部を想定した。

柱穴 精査を繰り返したが、P1の1本を検出したにすぎない。径は約10cm、深さ約20cmの穴で、その東側床面の一角が特に硬くしまっていた。

炉 単設單式石組炉である。掘り方は方形を呈し、一辺約60cm、深さ約10cmを測る。炉石は、大きなものでも幅約10cm、長さ約20cm、小さなもので幅約5cm、長さ約7cmとわりあい小型の円礫を多々用いている。各炉石は、縦長にしっかりと据えられており、円を意識した配置と窓われる。円形の炉としては、縦文中期前葉の朝日町不動堂遺跡第2号住居跡第1・2号炉〔小島1974〕の例がある。ただ、複設單式石組炉の一部として円形の炉がつかわされており、炉石も横長に据えられ、時期ともに当石組炉とは一致しない。今のところ、県下でも極めてめずらしい炉と言える。炉内には焼土が充満し、炉底に接して条線文をもつ深鉢形土器副部破片が見られた。炉底は平坦で、炉の周囲や上部に多量の焼土を残すわりには、焼土化が認められない。また、炉石も火熱による削れ・剝離がなく、長期間或いは継続的に使用された炉と言えないようだ。

遺物 覆土から第8図6の土器、炉内覆土から先の土器片が出土したにとどまった。いずれも、中期中葉の終わり~後葉の時期と考えられる。

(6) 第6号住居跡（第6図2、図版第7・8の上）

位置 X30Y11付近の平坦地に立地する。5号住居跡とは南東側で重複し、切り込まれた可能性が強い。

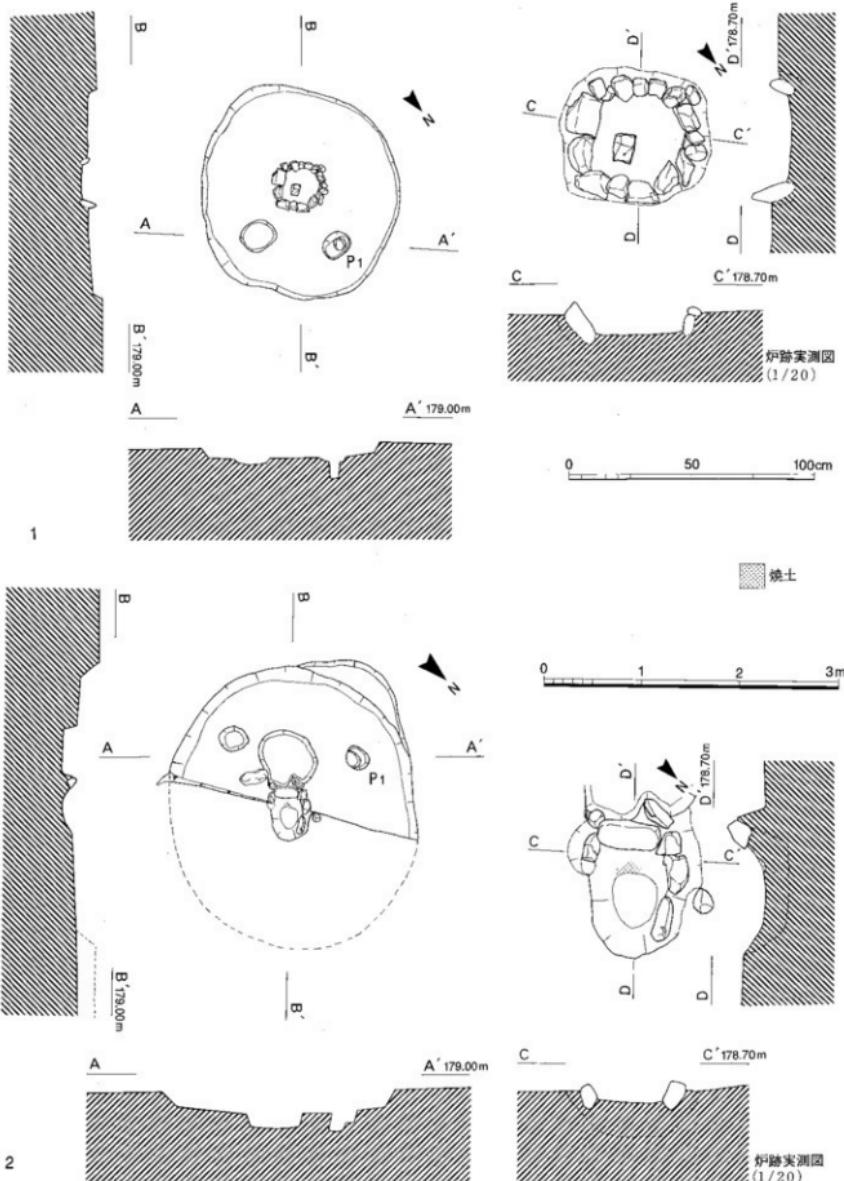
形状 5号住居跡と同様に過剰な掘削のため、掘り方の平面形・規模などはっきりしない。検出した北西側の遺存部から見て、3m×2.5mの楕円形を呈し、3層上面から約30cmを測る壁高を残す住居跡と推定できる。

方向・覆土 炉の向きから北西方向と見られる。覆土は、炭粒混じりの褐色土が全体を覆い、少量の土器片を含む。

床面・柱穴 検出部分はやや軟弱で、東に緩く傾斜する。柱穴はP1のみ検出し、主柱本数・配列が不明。

炉 掘り方が長軸約70cm、短軸約55cmの長方形を呈し、深さは約25cmを測る単設單式石組炉である。北西側で直径約60cm、深さ約20cmの穴を切り込む。性格は不明。炉石は最大のもので幅10cm、長さ30cmの円礫を横長に据えている。また、摺り鉢状に凹む炉内には、炭粒混じりの褐色土が充満し、炉底がわずかに焼土化していた。

遺物 覆土から中期中葉の終わり頃の深鉢形土器片が数点出土している。



第6図 第5・6号住居跡実測図(1/50) 1:5号住居跡 2:6号住居跡

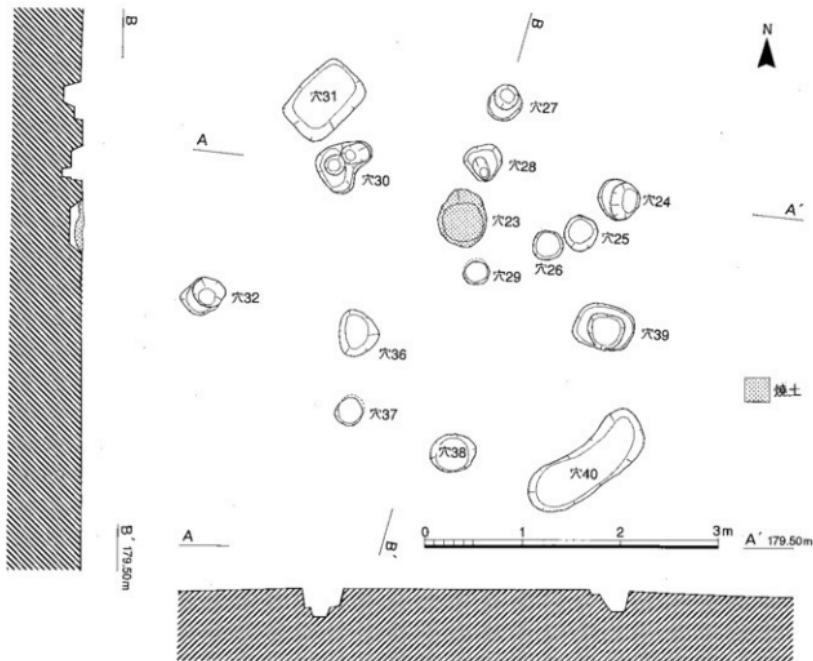
(7) 穴 (第7図、付図、図版第8の下)

検出した穴は、90個以上となる。大半の穴は第1～4号住居跡の周囲、つまり谷部の縁辺部及び斜面上半部に立地する。これらの中で覆土内に土器や石器など遺物が含まれたり、炭・焼土粒の混じりの有無及び掘り方の形態などにより番号付けを行なったものが49個を数える(付図)。残りの穴は、木根や後世の擾乱などに由来するものである。

もちろん、前者の中にも遺構以外の穴(穴01～04・06・07・13・15～17・20～22・31～35・40～44・49)が含まれている。第1・2・4号穴などは風倒木痕跡で、ドーナツ状に巡る黒色の覆土中に縄文中期中葉の終わり～後葉の遺物が混じった。第20・44・49号穴などは木根跡。また、第21・40・41号穴などは地山のシミ・擾乱跡と考えられる。

一方、確実な遺構としては、まず第8・9・12・18・19号穴があげられる。8・9・12号穴は、平面が直径0.6～1mの円形を呈し、深さが10～30cmを測る。いずれも炭粒混じりの暗褐色覆土内から中期中葉の終わり～後葉の土器片が出土した。特に9号穴で深鉢形土器の大型破片(第11図96)が見られた。また、18・19号穴は、前者よりひとまわり小さな円形の穴で、炭粒混じりの褐色覆土が20～30cmの深さで入り、中期中葉の終わり～後葉の土器片が伴った。

次に、第23～30・36～39号穴の一一群があげられる(第7図)。23号穴は直径約50cm、深さ約15cmを測る円形の掘り方をもつ。覆土上部に焼土が充満し、地床炉状を呈する。残りの穴群は、その周間に点在しており直径が20～40cm、深さが10～30cmで柱穴状の掘り方となっている。各穴は、4層上面が遺構確認面のため明確ではないが、一帯に23号穴を軸とし、25・27・30・36・38・39号穴を主柱穴とした住居跡が遺存すると見ることもできる。時期は、30号穴から中期中葉の深鉢形土器(第8図1)が出土しており、当該時期に当てられる可能性がある。(神保)



第7図 第23号穴付近遺構実測図(1/50)

3. 遺物

(1) 土器 (第8~13図、図版第9~15)

調査により出土した土器は縄文時代中期中葉から後葉のものと、古代の須恵器と土師器がある。縄文土器は遺構では第2号・3号住居跡からの出土が多い。

第1号住居跡 石組炉内より縄文を施した土器が若干出土した。時期は中期中葉から後葉と考えられる。

第2号住居跡 (第8図4・9・10、第9図11~40) 11は弧状の半隆起線で、半隆起線の幅等から古府式〔高塙1954〕と考える。4は口縁部から胴上部に幅広の半隆起線を横位に引き、その上を1条おきにクシ状工具で刺突する(以下クシ状刺突文と略す)。また半隆起線の帯状の区画内に、3から4条の縦の沈線区画を、上下に2及び3箇所配す。12・18は沈線間にクシ状刺突文を施す。14は半截竹管を縦に押圧、また15は横位に押し引く。19・21は半隆起線の凹部を棒状工具でなぞり沈線としている。これらは一部に古い様相を残すが古串田新式〔小島1972〕と考える。

21~34は沈線を主文様とし、23~33は工状の区画文を口縁部に施す。23・33は区画内に貝殻腹縁による刺突を施す(以下貝殻腹縁文と略す)。24~29・32は口縁端部に貝殻腹縁文を横位に巡らす。隆帶は22がクシ状刺突文、34はヘラ状工具で刻む(以下ヘラ刻みと略す)、36は貝殻腹縁文を施す。これらは串田新I式〔小島1964〕に比定できる。

35は薩帶上を長楕円状に押し引きし、38は平行する2条の隆帶を縦横に貼る。39は口縁端部に太い沈線を1条巡らしその下に細沈線を縦位に引く。これらは串田新II式〔小島1964〕と思われる。40は口縁部が緩く外反し、刺突及び沈線文より岩崎野式〔柳井1976〕と考える。37は隆帶を渦巻状にし、大木8b式平行期の新潟系の土器と考える。

9・10はほぼ完形品で床面直上より出土し、全面に二次的な火熱を受けている。9は有孔鍔付土器で口縁部の4箇所に把手を付ける。胴部は全面にRLの縄文が施行される。10は釣手土器で両側面に各2箇所の把手を付け、半隆起線で文様を構成する。時期は他の出土土器より考えると古串新式に近い時期と思われる。

第3号住居跡 (第8図3・5、第10図41~72) 41は半隆起線の幅が狭く、深く引いている事より古府式と思われる。43は口縁部の文様を沈線と隆帶で構成する。隆帶上にはクシ状刺突文が施される。42・44~48・50は幅広の半隆起線をもつもので、42・44・45は口縁端部をヘラ刻みするが、刻みの平行線から見ると、半截竹管状の工具によるものと考えられる。3は8図4と類似した文様構成である。しかし4は幅広の半隆起線で、3は平行沈線と相違がある。ただ、3は半隆起線の凹部を棒状工具でなぞっていると考えられる。同様な手法は51・54・67でも見られる。5は4.波状の口縁部で、波頂部に把手が1個つけられる。文様はヘラ刻みした隆帶間に縦位の沈線を引く、また隆帶は波頂部の下で渦巻き状の円を描く。66は波状口縁部に半截竹管を連続して刺突する。これらは古串田新式に比定できる。

49・53・55~65・72は沈線を主文様とするもので、49・57・62・64は工状区画、65は楕円状区画で区画内に貝殻腹縁文を施す。口縁端部及び隆帶上には52・58・60がヘラなしし棒状工具で刻み、53・56・63・64はクシ状刺突文が施される。これらは串田新I式と考える。

69~71は無文ないし縄文地に隆帶を貼り、隆帶上は70が縄文施文、71は棒状工具での刺突となる。また70・71は波状口縁の波頂部を内面に押している。これらは串田新II式に比定できる。

68は内外面に文様がある。内面にはS字状の文様を施し、釣手土器の釣手部分と思われる。時期は中葉と考える。

第4号住居跡 (第11図73~90) 73~76・78は幅広の半隆起線を口縁部に数条巡らす。75・78は口縁端部に半截竹管による刻みが施され、76は半隆起線の下端に半截竹管を縦に連続刺突する。これらは古串田新式と思われる。

77・80・82・84・85・87は沈線を主文様とし、82・84には工状の区画が見られる。79・83・86は隆帶間に縦位の短沈線を施す。85の口縁部には貝殻復縁文を横位に連続刺突する。これらは串田新I式と言える。

88は隆帶間に弧状の沈線を施す。89は口縁部に棒状工具で押し引いた隆帶を巡らせ、その下は細い平行沈線を施す。90は沈線と縄文で構成される。時期は88・89は串田新II式、90は後葉と考える。

第5号住居跡（第8図6） 住居の特殊性に關係するためか出土遺物はほとんど無い。6は無文で、比較的薄手のうえ胎土及び焼成は良い。時期は中葉の後半から後葉と考える。

第6号住居跡（第8図7、第11図91～93） 第5号住居跡同様遺物の出土は少ない。91は沈線、92は幅広の半隆起線、93はクシ状刺突文を施す。時期は中葉の後半と思われる。

その他造構（第8図2、第11図94～102） **第1号穴（95）** 沈線と口縁端部に貝殻腹縁文を施す。**第2号穴（94）** 沈線間に繩文を施す。**第4号穴（96）** 口縁部に幅広の半隆起線を平行に引き、口縁端部に貝殻腹縁文を巡す。**第8号穴（97）** 繩文地に渦巻き状の沈線文を施す。**第9号穴（98）** 貝殻腹縁文を施した隆帶区画内に沈線を施す。**第12号穴（100）** 幅広の半隆起線で文様を構成する。**第18号穴（99）** 口縁部に棒状工具で横位に連続刺突し、その下は細い沈線を垂下させる。**第21号穴（101）** ヘラ刻みした隆帶と半隆起線で構成する。**第30号穴（1）** 文様はクシ状刺突文を施した隆帶を基線に、半隆起線で器面を埋める。なお、隆帶は口縁部から胴部へ4箇所斜めに下ろすが先端は渦巻かない。また隆帶は左下がりとなり県内出土の類例はあまりない。**第32号穴（102）** 沈線区画に貝殻腹縁文を施す。これらの土器の時期は1が古府式、96・98・100・101が古串田新式。94・95・102は串田新1式。97は大木8b式と考える。

包含層出土の土器（第8図2・8、第12・13図） 古府式 103～105は隆帶と半隆起線で構成する。106は半隆起線を半截竹管で押し引く。107は赤影を施す。

古串田新式 2は頸部に貝殻腹縁文を施した隆帶を巡らせ、その下に沈線による渦巻き状文を4箇所配す。109・110・112・116・124は幅広の半隆起線を特徴する。108・111・112・115・119は半隆起線の凹部を棒状工具でなぞり沈線とする。122・129は隆帶を渦巻きにし、129は隆帶間に沈線を継位に引く。114・123は浅鉢と思われるもので、114には「の」字状の沈線文が施される。隆帶及び半隆起線間にヘラ刻み（108・116・122）と貝殻腹縁文（114・115・119・124・129）がある。

串田新I式 118・120・121は沈線区画内に貝殻腹縁文を充填する。125～127は口縁部に沈線で工状の区画を施す。130～133は口縁部に隆帶もしくは沈線で区画し、その区画内に継位の短沈線を施す。134は棒状工具で刺突した隆帶間に沈線で文様を施す。135は隆帶間に屈曲した沈線を垂下させ、隆帶及び口縁端部には貝殻腹縁文を施す。136は口縁端部と沈線区画内にクシ状刺突文を付す。

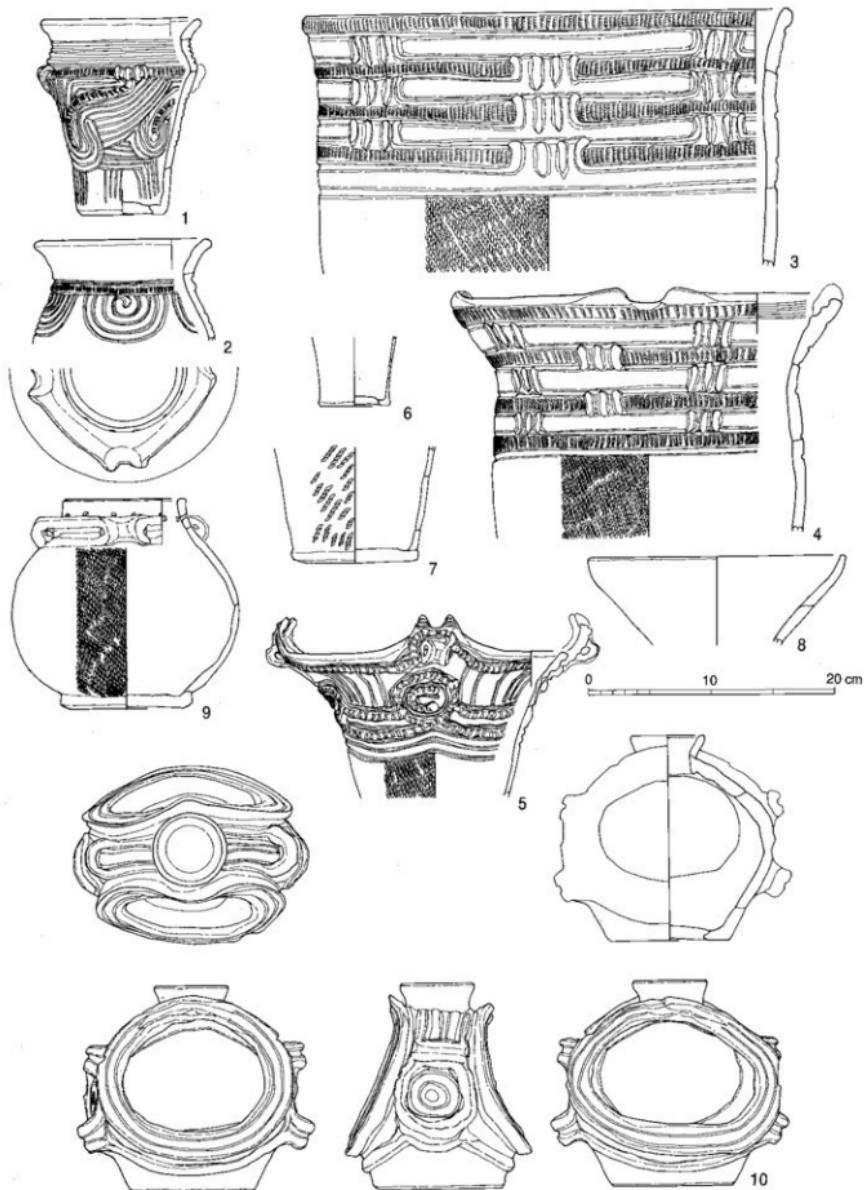
串田新II式 137・138・140・141は隆帶をなし沈線区画内に横「ハ」字状の沈線を施す。139・142・143・145・146・149～151は隆帶を口縁部に配すもので、地文は無文ないし繩文施文となる。隆帶上はヘラ刻み、棒状工具による刺突、繩文施文がある。144は口縁端部に円形の圧痕が横位に連なる。147・148・152は平行沈線間に列点文を加える。なお、152は文様構成及び口縁部の外反等より岩崎野式に近いと考える。

153・154は攝入品と考えられるもので、沈線を渦巻き状にし大木8b式と思われる。155は胎土に金雲母を多量に含み、沈線で渦巻文を彫り込んだ突起を付する。また、口縁内面には隆帶を1条巡らす事等より曾利式と考える。

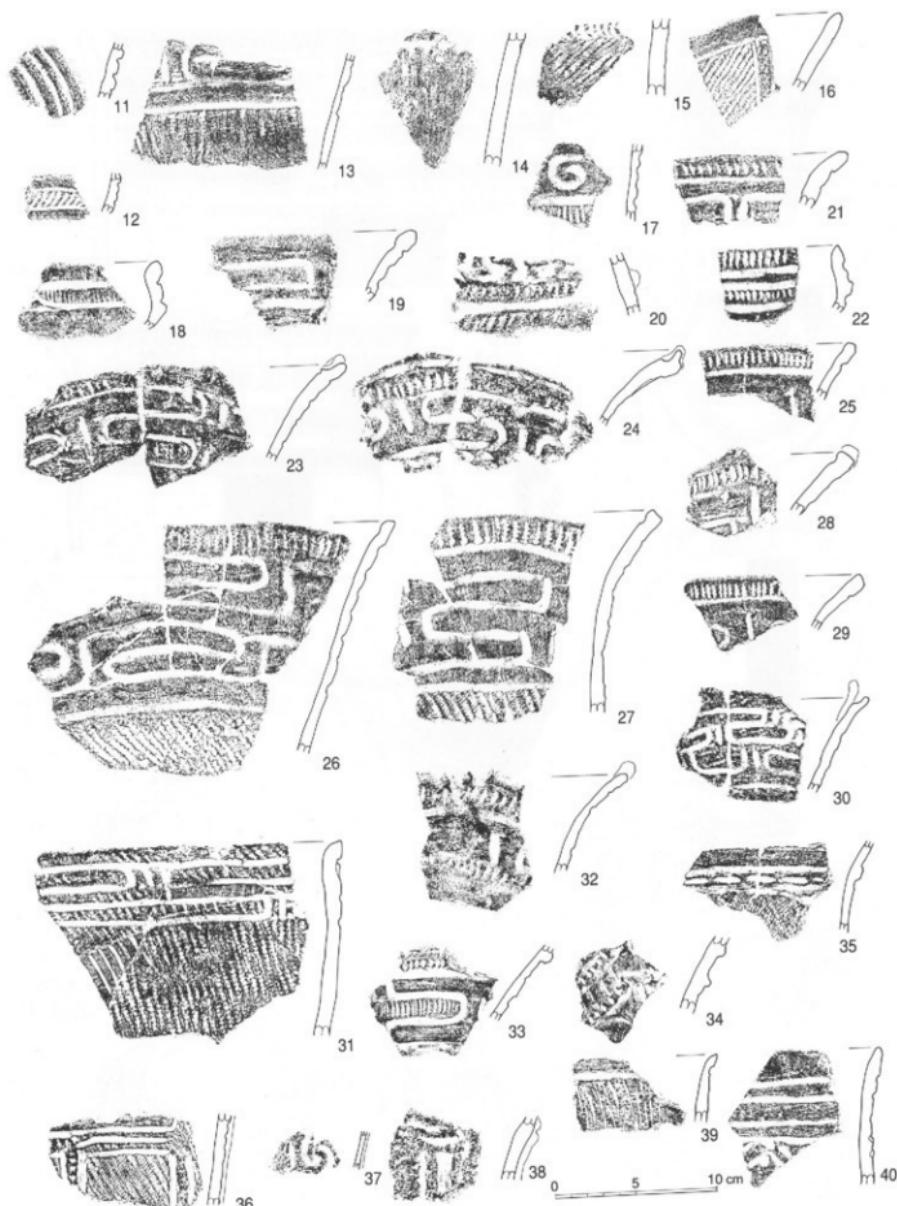
以上出土遺物の大半を占める繩文土器は、中期中葉の古府式から中期末の岩崎野式まで出土したが、主体は古串田新式と串田新1式である。この中で前記した様に第2号住居跡の4と第3号住居跡の3は文様構成においてほぼ同一であるが、4は半隆起線、3は半隆起線の凹部を棒状工具でなぞっている点が異なる。そのため3は半隆起線では凹凸が少ないと、沈線化でより文様を明確化していると考える。この点から考えれば串田新I式は沈線が主体であって、半隆起線は用いられなくなる変化の一端になると推定する。また3・4の文様構成は古府式土器の一群に類似するものが、県内の浦山寺蔵遺跡〔酒井1977〕・境A遺跡〔狩野1991〕等に見られ、その形式的な変遷過程が窺われる。

その他（図版第15の156～160） 頸唇器（156～159）と土師器（160）が若干ある。いずれも遺物包含層からの出土で、156・157は短頸壺、158は長頸壺、159は壺の胴部破片である。160は楕円底部に糸切り痕を残す。時期は156が8世紀前半から中頃、160が9世紀後半から10世紀前半と思われる。

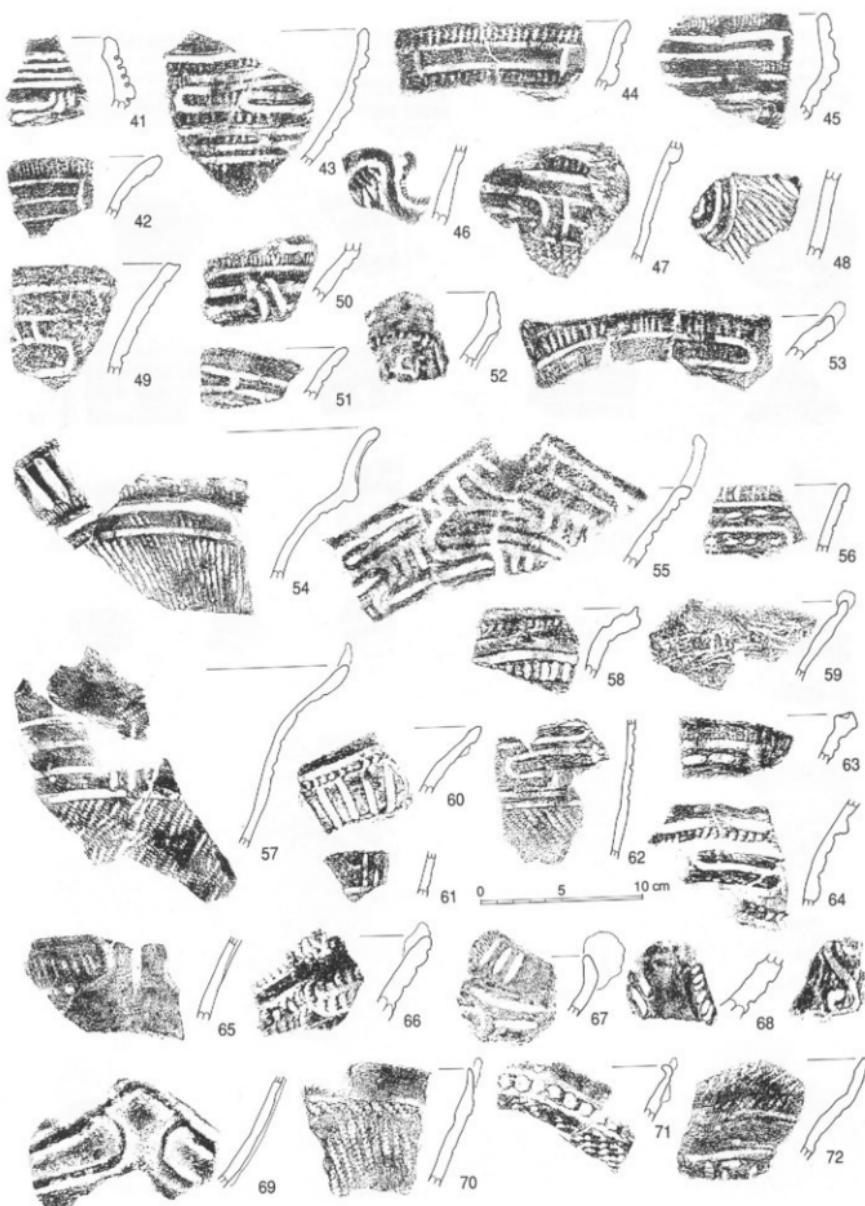
（狩野）



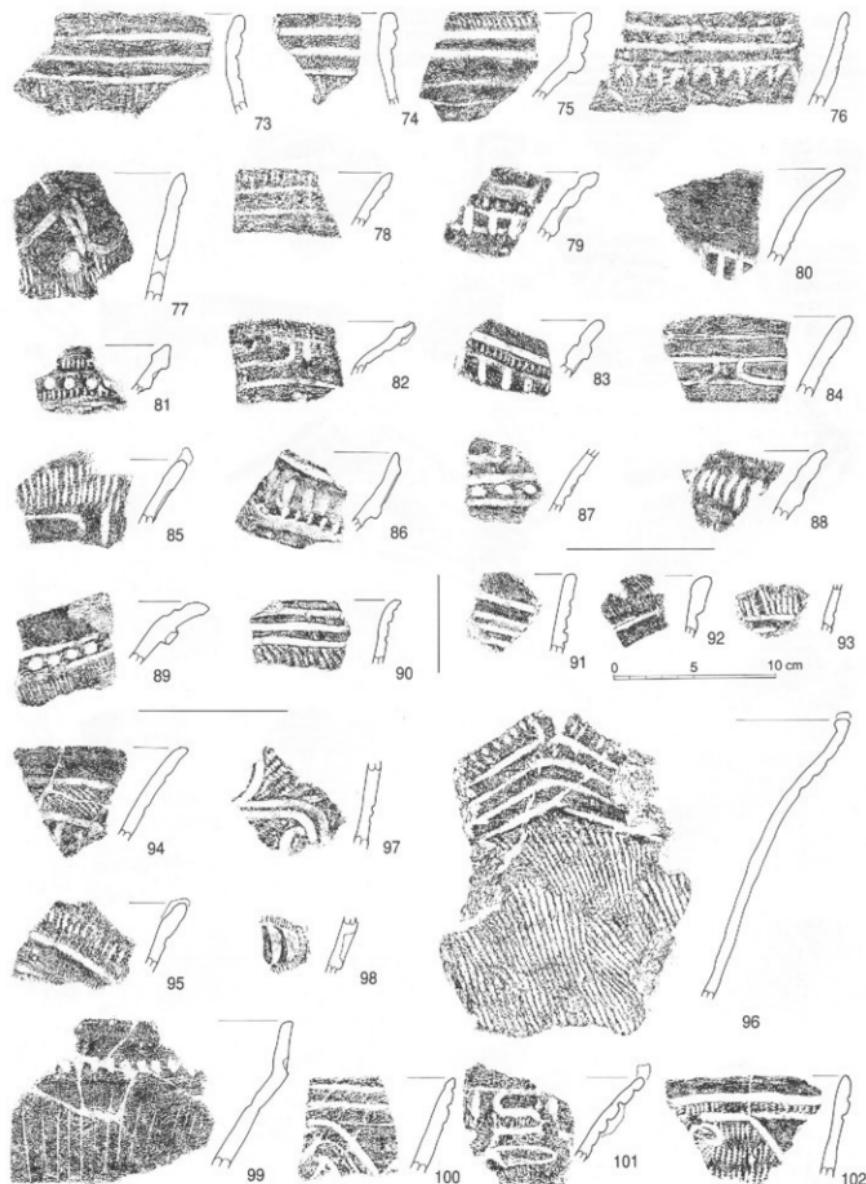
第8図 土器実測図(1/4) 1:第30号穴 3・5:第3号住居跡 4・9・10:第2号住居跡 6:第5号住居跡 7:第6号住居跡



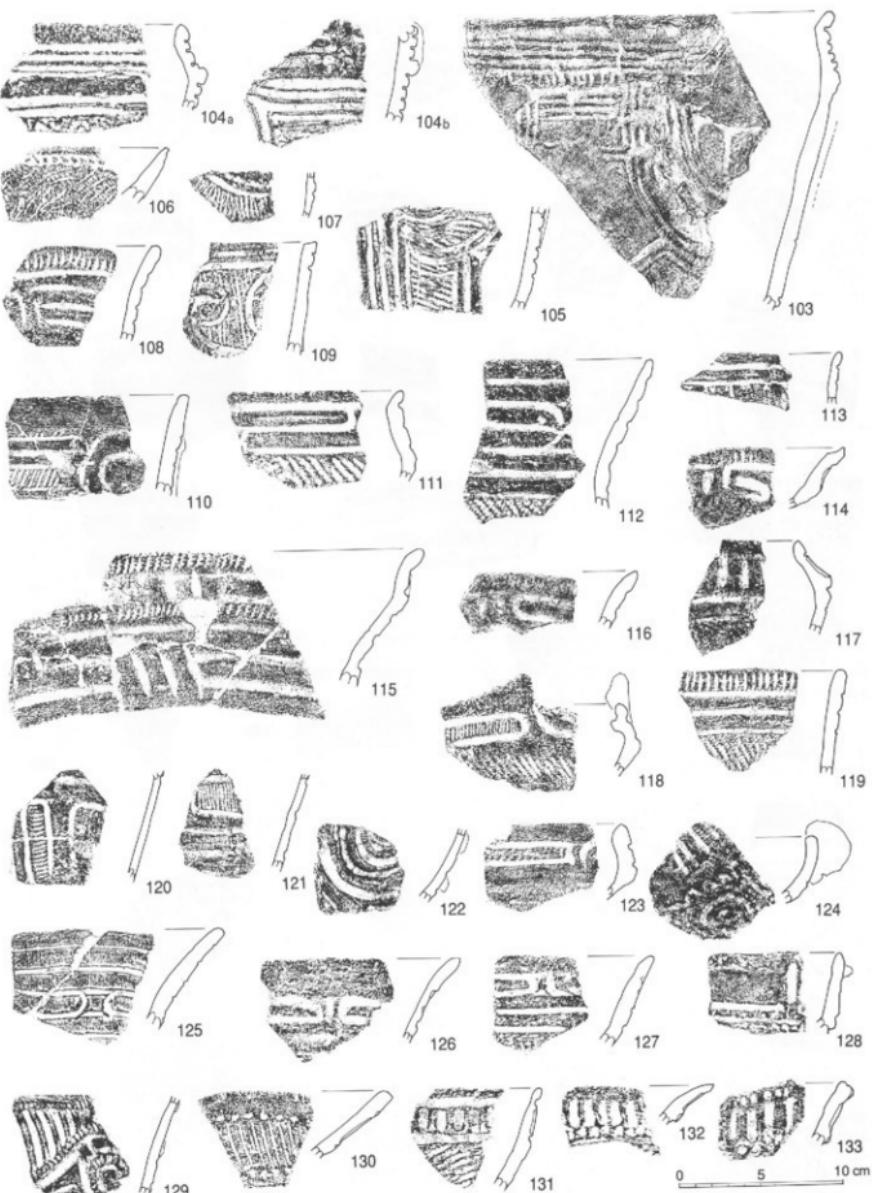
第9図 土器拓本図(1/3) 第2号住居跡



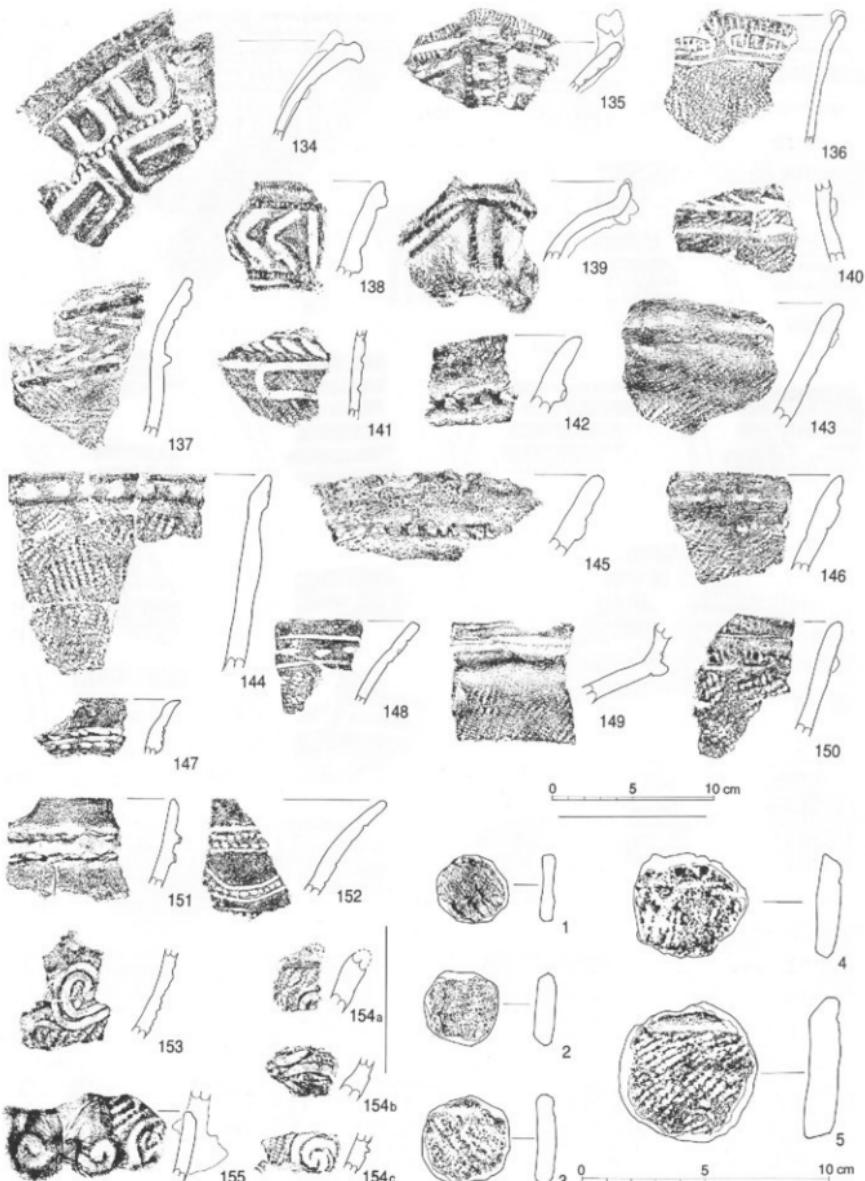
第10図 土器拓本図(1/3) 第3号住居跡



第11図 土器拓本図 (1/3) 73~90:第4号住居跡 91~93:第6号住居跡 94:第2号穴 95:第1号穴 96:第9号穴
97:第4号穴 98:第8号穴 99:第18号穴 100:第12号穴 101:第21号穴 102:第32号穴



第12図 土器拓本図(1/3) 遺物包含層



第13図 土器拓本図(1/3) 134~155:遺物包含層・土製品実測図(1/2) 1:第3号住居跡 他は遺物包含層

(2) 石器（第14・15図、図版第15・16）

石器には磨製石斧・打製石斧・石錐・凹石・擦石・石皿・砥石・剥片等が見られるが、量的には磨製石斧・打製石斧・凹石が多い。出土箇所は遺構では第2・4号住居跡が特に多かった。また、時期は伴出土器が縄文時代中期中葉の後半から後葉に限られることより、土器と同様な時期と考えられる。

磨製石斧（第14図1～20、図版第14） 87点出土し石器の中で一番多い。石材は蛇紋岩系と硬質砂岩系に大別できる。

蛇紋岩系の磨製石斧（第14図1～11） 未成品と破損品を含めて45点出土した。完形品は少ないので、第2号住居跡の覆土及び床面直上から1～4の小型品が出土した。この4点は刃部に使用痕等はほとんど見られず、他の釣手土器や有孔鉤付土器の出土状況と合わせて、住居跡の廃棄に関して特別の意味合いが考えられる。^注

形態的には小型品（1～7）と大型品（8～11）に分類できる。石材は本県東部に産出地があり、おそらくその周辺より完成品として搬入されたものと思われるが、一部細長い礫の側面部に敲打を加えた未成品と考えられるものがあり、当遺跡で製作されたものがあると思われる。製作技法は剥離により整形して研磨すると、剥離の後に敲打により整形して研磨する（7・10）の2種類が観察できる。

硬質砂岩系の磨製石斧（第14図12～20） 42点出土したが完形品は16の1点だけで、ほとんどが破損している。遺構からの出土は第4号住居跡から多く見られ、砥石等の出土と併せて同住居跡が製作跡的な場と推定される。形態的には大型品のみで、蛇紋岩系に見られる小型品が無く、石材による用途が限定されていたと考えられる。

出土品には未成品が多く見られ、各製作工程を示す資料があり、当遺跡で製作していたものと考えられる。その製作工程は常順寺川に近隣する立山町岩崎野遺跡（池野他1976）、二ツ塚遺跡（橋本他1978）、大山町花切遺跡（狩野他1988）等で確認された行程と同様で、第1段階は河原の松石を原材とし、荒削して柱状の素材を得る。第2段階は剥離により大まかな形状に整える。第3段階は敲打により剥離痕及び自然面を丁寧に済し、凹凸をほぼ平坦になるまで加工を加え、最終的に側面の綾までこの段階で整形する（17～20）。第4段階は全面に研磨を加えて仕上げ完成品とするの4段階に区分できる。

打製石斧（第14図21～25） 出土点数は27点あり、ほとんどが砂岩系の石材で他に凝灰岩等がある。形態的には短冊形（21・25）、撥形（22～24）に分類できる。

敲石（第15図26） 第2号住居跡より硬玉製が1点出土。石斧等の製作に敲打具として使用されたものと思われる。

石錐（第15図27～31） 9点出土した。偏平な楕円錐の長軸両端を打ち欠いている。27は第4号住居跡出土。

石皿（第15図32） 破損品が9点出土した。砥石との判別は中央部がレンズ状に凹んだものを石皿とした。

凹石（第15図33～38） 磨製石斧に次いで多く36点出土した。砂岩系の扁平な楕円ないし円錐の両側に1～3箇所の凹がある。35は敲石としても使用されている。

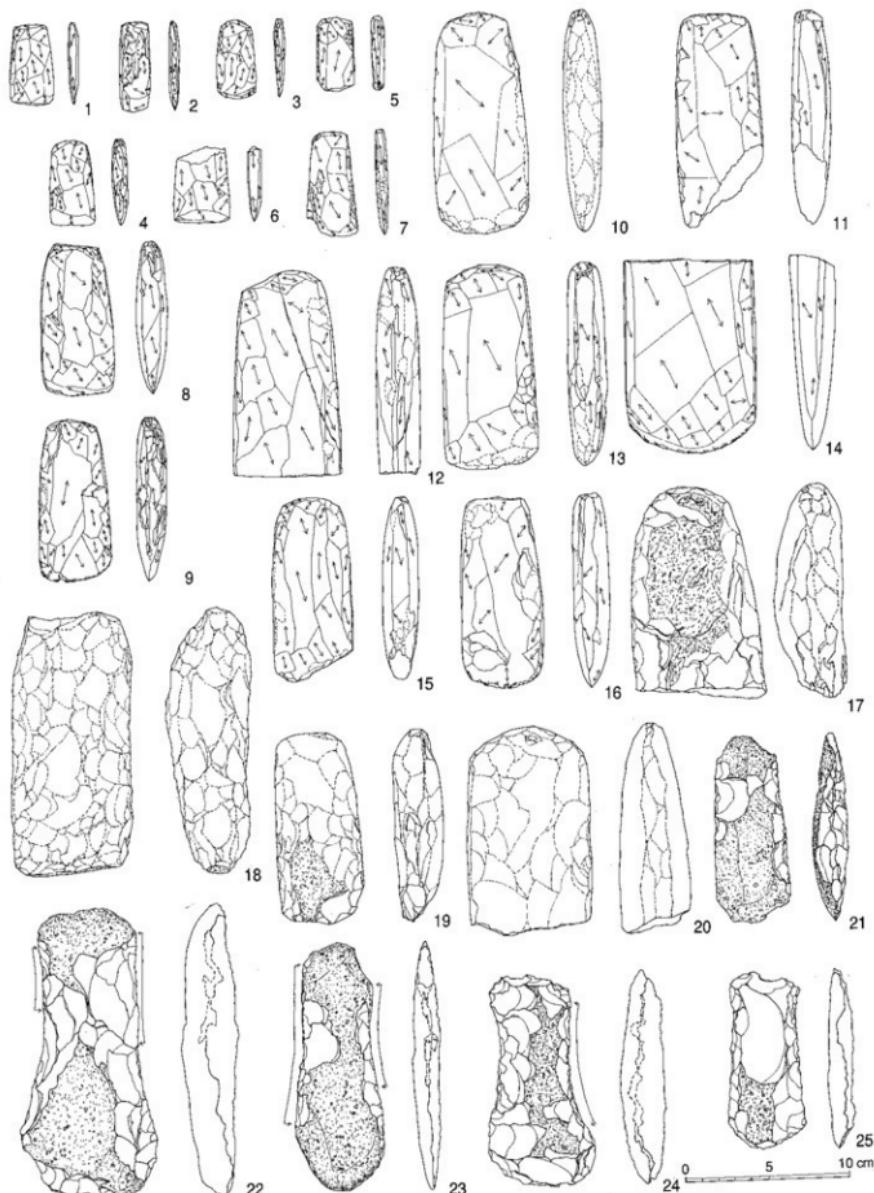
擦石（第15図39～41） 41点出土した。扁平な楕円錐の側面の片面を擦面として使用するが、40は両側面を使っている。39は凹石としての使用も見られる。

その他 図示はしなかったが他に砥石が6点、硬質砂岩・碧玉・チャートの剥片等があり、特に碧玉の剥片は第2号住居跡より出土しており、玉作りに関係する遺物と考えられる。

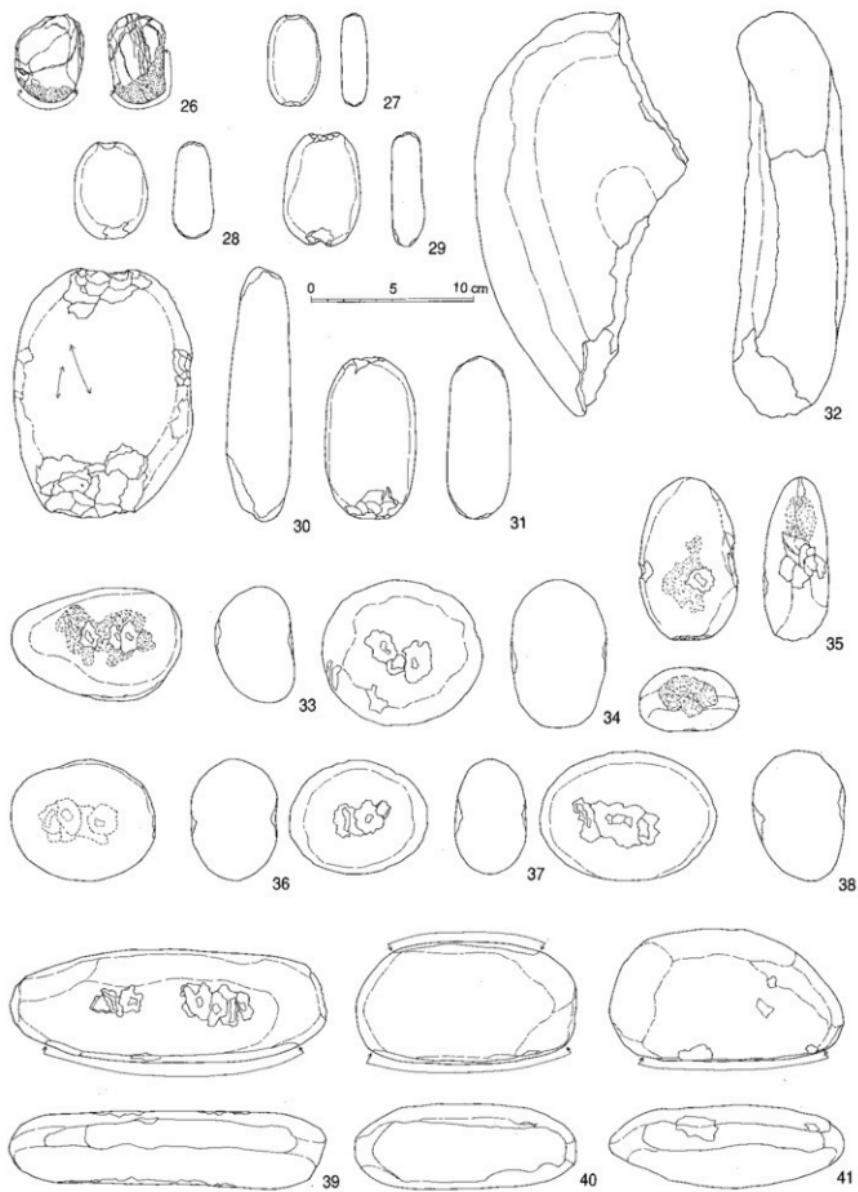
(3) 土製品（第13図1～5、図版第14）

種類は少なく、円板状土製品と図示しなかったが板状の土偶と考えられる破片が1点出土した。円板状土製品は土器片を円板状に加工したもので、1～3は周囲を擦り、また4・5は周囲を打ち欠きで整形している。（狩野）

注 第2号住居跡の小型磨製石斧と完形な有孔鉤付土器・釣手土器の出土状況より考えたが、それ以外に第8図10の釣手土器と類似した出土状況例として、本遺跡の平成元年に調査した第8号住居跡がある（齊藤・岡本1990）。同住居跡は覆土に後土が堆積し、その上より釣手土器がほぼ完形な状態で出土している。おそらく住居跡の廃棄に関係し、その一端に関わる祭祀的な要素を想定するが、ただ確例が少なく今後の資料の増加に待ちたい。



第14図 石器実測図(1/3) 1~4・8・9・11・17・19:第2号住居跡 7・12~14・20:第4号住居跡



第15図 石器実測図(1/3) 26・28:第2号住居跡 27:第4号住居跡 35・37-39:第3号住居跡 33:第21号穴 34:第30号穴

IV まとめ

1. 東黒牧上野遺跡は、常願寺川扇頂部の左岸に面する東西約2km、南北約0.2~0.6kmの段丘上に位置している。遺跡はこの段丘上に約40万m²と広大な面積をもって立地しており、これまでの分布調査や試掘調査などによって時代や時期を異にした計6地区のまとまりとして存在することが判明している。

今回の調査対象地は、遺跡東端のA地区にあたり、段丘の縁辺部沿いに広がった部分である。当A地区については平成元年度に研究学園都市構想に基づく富山国際大学のグランド建設に先立って本調査され、その成果を基に県の史跡指定地として保存がはかられた箇所があり、今回の調査部分とは北にわずかな距離をおく。内容的には、約3,500m²の調査対象地内に長軸8.2m・短軸6.4mの橢円形を呈する大型住居跡1棟を含め、29棟にもおよぶ竪穴住居跡群が発見されている（斎藤・岡本1990）。時期としては、縄文時代中期中葉の前半から後半あたりを主体としており、今回の調査箇所とは土器型式で1~2段階古い。また、以前の分布調査によって調査箇所の南東側には同時代の別の遺物分布範囲が確認されており、未発掘でその内容がはっきりしないもののA地区一帯では、若干の時期・場所を経て集落の立地が繰り返されたと言えるようだ。その地形を見るといずれも微地形として付近一帯に見られる段丘の迫り出し部分に位置している。

2. 遺物としては、縄文時代中期中葉から後葉の土器・石器・土製品、古代の須恵・土師器が出土している。

この内、出土遺物の大半を占める縄文土器は、広義の土器編年から古府式〔高尾1954〕段階から岩崎野式〔柳井1976〕段階に入るものである。ただ、その主体は、先にも述べられたように古串田新式〔小島1972〕から串田新I式〔小島1964〕段階にある。

さて当該期、県下（北陸）の中期土器の流れをたどれば、一大画期の時期にあたる。中期初頭に始まり前葉から中葉前半にかけて発展する北陸中期土器が、中葉後半あたりから勢いが衰え、模索期間をおいて、後葉にいたりそれまでとはうって変わったような、北陸独特の土器と言える串田新式土器の成立をみる。しかし、その模索期間（過渡期）の詳細については、今だ混沌の域を脱したとは言えないのが現状であろう。

今回出土した土器群は、内容的にその過渡期の土器を多く含み、この点、同時期の解明にあたっての良好な資料と考えられる。ほぼ同一の文様構成をもつ二つの土器のうち片方が半隆起線のまま、もう一方が半隆起線間の凹部を棒状工具でなぞり、沈線化により文様の明確化をはかろうとするものなどは過渡期の様相の一端を窺わせる。さらに、このことは、串田新I式期では半隆起線が用いられなくなり沈線文となる変化につながる動きとしてとらえられ、これまで不鮮明とされた当該期の細部において一線を引く一つの手がかりを示すこととなろう。

3. 遺構としては、竪穴住居跡6棟（うち1棟は炉跡のみ検出）と穴群がある。遺構群の大半は、調査時に微地形として検出された埋没谷の西側縁辺部に立地する。一帯では、住居跡4棟・穴多数がまとまり、その背後のやや離れた箇所に2棟の住居跡が重複する。

遺構の主体となる竪穴住居跡群を概観すると、前者がいずれも隅円の方形状プランを呈し、一辺が3.5~4.5m前後の規模をもつ。3号住がひとまわり小さめで、4号住がやや大きめである。また、2号住は、掘り方の深さが70cmと県下でも極めて深く、遺存状況が良好なものであった。住居跡の時期としては、3号住のみ炉石が抜取られており、時間的なずれとるとかにもよるが、住居群が近接して構築されているものの相互の重複は見られず、また、同じ主軸方位をとることから同一時間幅で作られた可能性が強い。その所属時期は、出土遺物の年代からみて、縄文時代中期中葉の終わり~後葉の前半代の中に当てられるようだ。各住居の構造は、4本柱・単式単設石組炉と

なる。その配置から各々は北東側を出入口とし、先の谷側に向くことが判明した。

一方、後者は横凹もしくは凹形のプランを呈するもので、1本主柱（？）・単式単設石組炉の構造をもつ。規模は、前者のはば1/6のと極端に小型である。5号住は6号住を切り込むことや、住居の主軸が異なることから両者に時間的な差がよみとれる。ただその差としは、覆土の主体となる土層の色調・質が類似することから大差なく、さらに5号住の主軸及び出入り口が、前者の住居跡群と同一方向であり、覆土の色調・質が似かることからしてそれらと同一時間幅の同一集落を形成したものと考えられる。当集落は、前述の埋没谷の縁辺部に沿って住居群が立地するようで、4号住の北側では先の試掘調査〔久々1989〕時、ほぼ同時期の遺物集中箇所が確認されている。今回の調査は、同集落の南西側一角を検出したことになろう。

次に、個々の遺構の中で注目されるものとすれば、第5号住居跡の存在が上げられる。

富山県下における绳文時代中期中葉の終わりから後葉にかけての竪穴住居跡を見ると、第2～4号住居跡程度の規模・形態をもつものが、多々見られ一般的である。これに反し、当住居跡は、一人寝食するのが精々といった床面積で、一見、住居とは判断できないような規模を呈する。

片屋根風と思わせるような1本主柱の構造や、床面積のわりには大きく作られた石組炉。その炉も前章で記したとおり、今のところ例を見ない特異な作りであり、使われ方も他の住居と異にして断続的で、しかもその間いわゆるかたずけを行なわず使用されたものらしく、焼土が炉を覆うように堆積した。また、覆土内の遺物も他に比較して極めて小量である。さらに、その存在位置は、遺構密集区から離れ・孤立し、付近には他の遺構は存在しないようだ。このことは、重複する第6号住居跡にもいえることで、当地への立地にあたり何らかの約束ごとがはたらいたように感じる。となると、当住居の使われ方ひいては、集落内の役割といった事柄に興味がもたれるところである。しかし、現段階では、上記した以外に考古学的な手がかりをもたず、その解明は今後の課題としなければならない。

ただ、民俗例の中にその参考となるものが認められるので最後にふれておく。いわゆる儀礼習俗としての産小屋・月小屋習俗の例である。浅学のため手近の資料に頼っただけで、富山県内の例については確認していないが、福井県若狭の例〔文化庁文化財保護部1989〕・石川県能登の例〔石川県立歴史博物館1993〕にふれることができた。それによると、「能登では戦前は、実家の納戸で、それ以前は各地に産小屋の痕跡や伝承があった」といい。羽咋市寺家町に残る産小屋跡の写真が掲載されており、「産小屋は一間四方の掘立小屋で、冬にはカワウソが足を暖めにくるというほど寂しい場所にあった」と記されている。また、別に「出産は稀れだった。そのため産婦は実家の納戸でおよそ21日間、ところによっては75日間にわたって忌みの生活を強いられた。その間家族とは別の火で食事がつくられ、竈・囲炉裏・神棚・蔵・井戸などに近寄ることも敷居をまたぐことも許されなかった等」と記載されている。さらに、若狭の例については、載録された敦賀市繩間地区における産小屋と月小屋の記録を別表として以下に抜粋した。

以上、上記の資料いずれも、小規模な建物・一般集落からやや離れた孤立した建物として存在する点で、第5号住居跡のあり方と共通するように思える。しかし、これは単なる現象的なとらえ方にすぎず、これをもって当住居の性格づけを行なうことは性急と言えよう。昭和48年、朝日町不動堂遺跡第2号住居跡〔小島1974〕の発見いらいにとかく大型住居跡が注目されてきた昨今、当資料のような住居跡の存在についても今後注意する必要性を感じる。

(神保)

表 産小屋と月小屋の例（文化庁文化財保護平成元年11月20日発行「無形の民謡文化財配録第32集一若狭の産小屋賀河内」より抜粋）

引用・参考文献

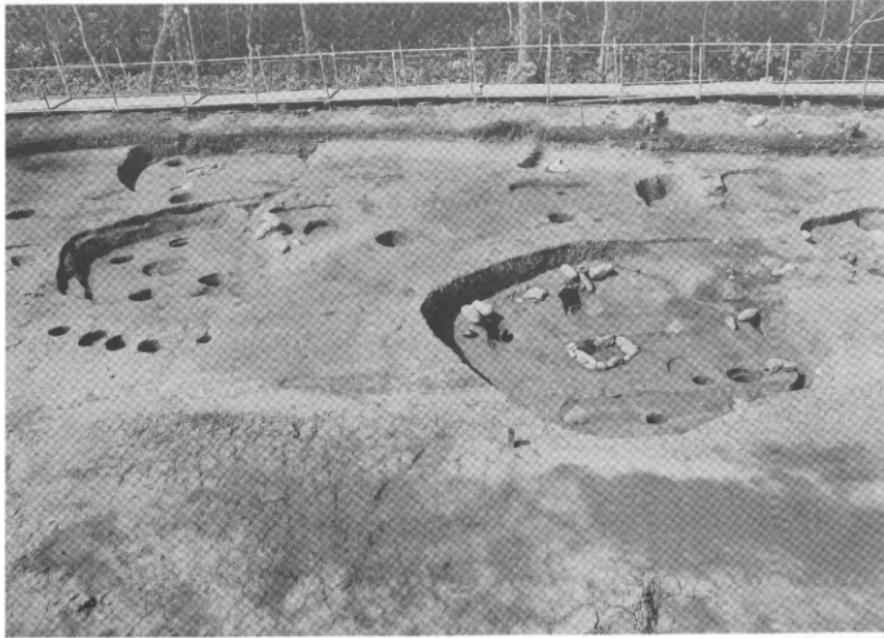
- | | | | |
|-------------|-------------|---|--|
| イ | 野口秀一郎・野村勝一郎 | 1978 | 「高山市立町田宿温泉旅館業者連絡会議要旨」 富山県教育委員会 |
| 石川立誠・立誠博物館 | 1983 | 「高山と曾我：この町の小作」 「侍屋敷風俗」 等、益み、悦び一加賞、能登の人生儀ル」 | |
| カ | 狩野一雄 | 1981 | 「高山市立町田宿温泉旅館業者連絡会議要旨」 大阪府教育委員会 |
| 狩野一雄 | 1981 | 「II 遠慮と中世の土木」 立派 土木各巻 2 中期 2 中業 (3 復活) 「北陸自動車道遭難調査報告-新日町廻ら→八ヶ岳跡跡跡」 富山県教育委員会 | |
| 小島義徳 | 1984 | 「高岡城と城下町竹富町郷土文化」 高岡市教育委員会 | |
| 小島義徳 | 1972 | 「越中守」 高岡市史考文集、所収 | |
| 小佐藤和也 | 1974 | 「高岡城と城下町」 高岡市教育委員会 | |
| ク | 久保田義典 | 1981 | 「高岡城と城下町」 見聞録、所収 |
| 久保田義典 | 1981 | 「高岡城と城下町」 見聞録、所収 | |
| 久保田義典 | 1981 | 「六代宇都御門守源氏孫による高岡城改修工事記述」 真庭市史編纂委員会 | |
| 久慈也郎 | 1954 | 「第1章 大河の流れ」 大河の歴史、 | |
| 濱田英三 | 1981 | 「II 盆のあおり」 五條 土器、「富山県宇奈月町寺泊温泉緊急避難説明会概要」 富山県教育委員会 | |
| 吉澤英一 | 1954 | 「高山市立町田宿温泉旅館業者連絡会議要旨」 大阪府教育委員会 | |
| 高尾重治 | 1954 | 「金沢古賀吉原遊興調査報告」 石川考古研究会等巻6 第6号 | |
| ハ | 柳本正 | 1973 | 「高岡市立町田宿温泉旅館業者連絡会議要旨」 富山県教育委員会 |
| 柳本正・柳井勝・瀬戸豊 | 1981 | 「高岡市立町田宿温泉旅館業者連絡会議要旨」 富山県教育委員会 | |
| ハ | 文化伝承研究会 | 1981 | 「高岡の歴史におけるアラビア貿易」 一般市民講習会開催地、1 横向の山小屋と月経宿留」 「無形の民俗文化財 安堵第一講」 おもてなしの盆差屋根を解説 |
| ハ | 相馬義典 | 1978 | 「II 四季の色彩」 4 清水、水路、「高山市立町田宿温泉旅館業者連絡会議要旨」 富山県教育委員会 |



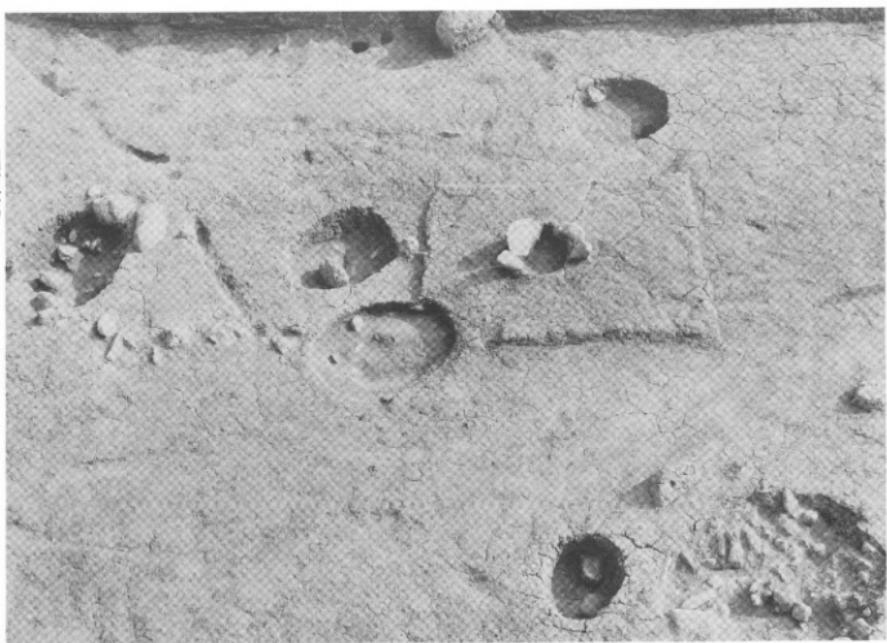
東黒牧上野遺跡A地区発掘調査区全景



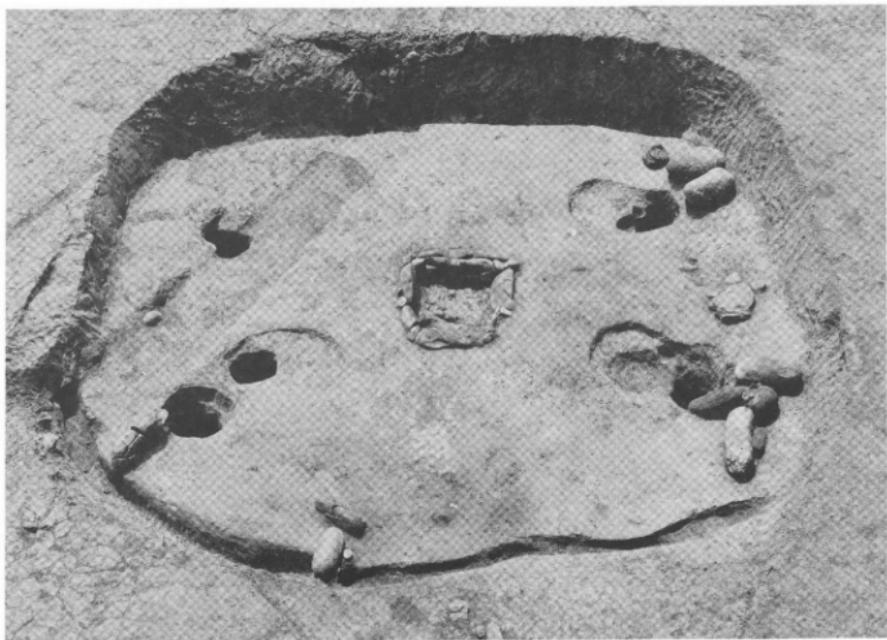
調査区西側全景（東より）



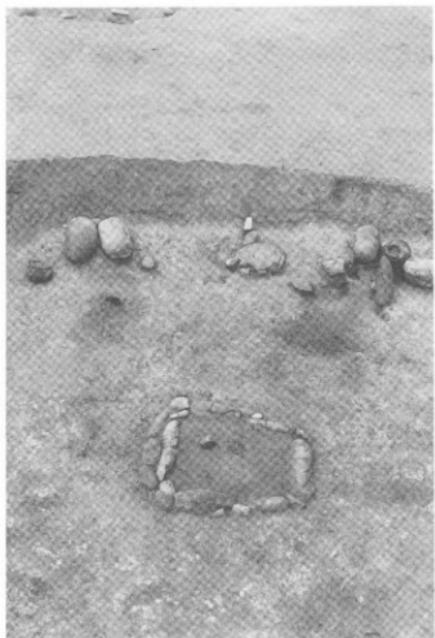
調査区中央部全景（南より）



第1号住居跡付近全景（北より）



第2号住居跡全景（北東より）



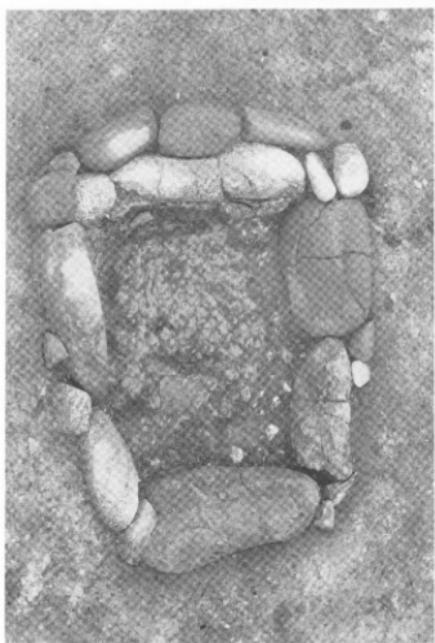
第2号住居跡遺物出土状況



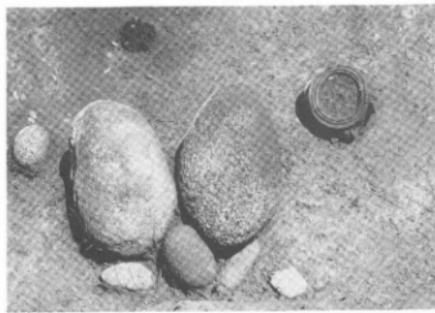
同土層及び遺物出土状況（南より）



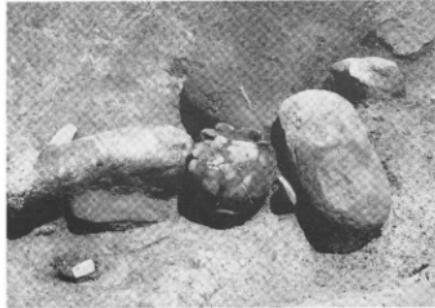
同土層及び遺物出土状況（北より）



同炉跡（北東より）



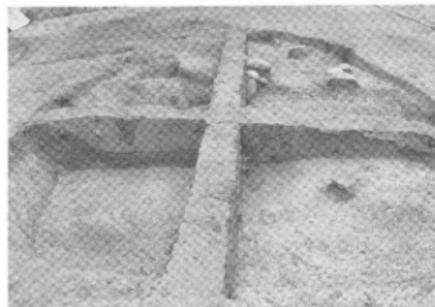
同釣手土器出土状況（北より）



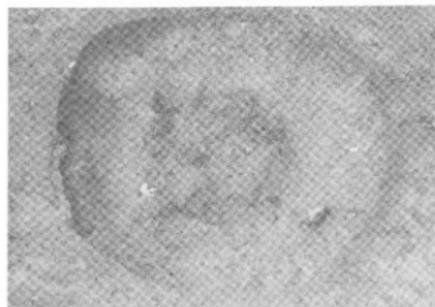
同有孔鉢付土器出土状況（北より）



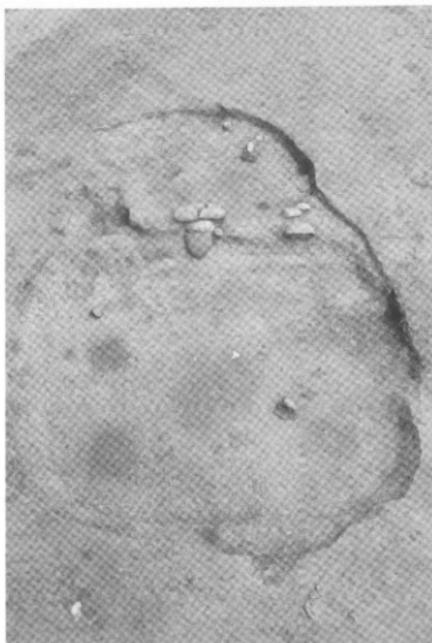
第3号住居跡全景（北東より）



同土層及び遺物出土状況（南西より）



同炉跡（南より）



同遺物出土状況（南西より）